

第17回 蘇東坡は杭州での最初の1年の苦渋を語った

——心に其の非を知るも口には諾唯する

2018年8月14日（火）。

「あのさあ、トバー君が赴任した杭州（こうしゅう）っていうのは、どんな町だったのかなあ？ 叔父さん、教えてくれる？」

「えっ、わたしがですか？ もしかして、今日は音声データをもってきたのですよね。だったら、杭州についてトバー君から話があったのではないですか？」

「これを聞いてもらったらわかるけど、サクサク進めたいからって、とくに説明がなくて、ボクとしてはなるべく口をはさまないようにしようと思って……あと

で叔父さんから教わればいいかなあっていう気もあつたし」

「でも、わたしは杭州に行ったことがありませんし、詳しい知識もありませんし、まして蘇東坡の時代の杭州などわかるはずがないのですが、それでも、なんとなくイメージするだけなら秘策がないわけではありません」

「へーえ、秘策……叔父さんがそうやってしたり顔をしているのをみると、なんかインチキくさい感じがしてしまうけどなあ」

「平塚の博物館に行くと、江戸時代の平塚宿の様子を再現した模型が置いてありますよね。小田原城の天守閣には昔の城下町の復元模型があります。模型を眺めながら、自分がここの街角に立っていたらとか、あれこれ想像すると楽しいですよ。杭州については恰好の模型、縮率約10分の1の模型が、実は東京にあるのです」

「へーえ、そうなの？ でも、10分の1っていったら、かなり大きくない？ 杭州の大きさがどれくらいか知らないけど、1キロ四方だったとしても、それじゃあ、うちの町よりちっこいけど、模型は100メートル四方だよ。そんな大きな模型があるとは思えないよ。やっぱ、インチキくさいなあ」

「わたしは週に1回仕事で東京に行き、行き帰りに不忍池しのばずのいけのほとりを歩いています。そのあたり一帯こそ、実は杭州の10分の1模型なのです。わたしが勝手にいっているだけではなくて、江戸時代には、そのように認識していた人たちが実際にいたようです」

「そうなの？ 叔父さんみたいなヘンな人が昔もいたのかなあ」

「不忍池を10倍に拡大すると、杭州の名勝西湖せいこになります。西湖は文字通り、杭州の町の西側にある湖です。不忍池のあたりを杭州の模型に見立てるには東西

南北を反転させる必要があり、すなわち、不忍池の西側の東大から湯島ゆしまにかけてのあたりが杭州の市街地に相当します。本郷ほんごう通りを歩きつつ、杭州のメインストリートを歩いていると想像するのです。かつての風景を偲びやすようと、ちようど建っている湯島聖堂が杭州市街の北のはずれです。御茶ノ水おちやのみずの駅が中国の南北を結ぶ大運河の終点で、そこから蘇東坡は杭州に入ったと想像すればよろしいでしょう」

「神田川かんだが大運河の模型だったこと？ かなりムリムリだね」

「不忍池の北東側にある上野うえのの丘は、杭州の南西側の山並みに相当します。上野の丘には清水寺きよみずでらの観音堂や寛永寺かんえいじの五重塔がありますから、杭州の山並みに点在していた宋代の壮麗な建築群を想像するのは極めて容易でありましょう」

「ふーん、容易なのかなあ……」

「上野の丘から不忍池の北側にかけて上野動物園があります。そこは北宋の時代の官舎群、後の南宋の時代の皇城に相当します。パンダ舎に、杭州知事もしくは南宋の皇帝がいたと思えばいいのです。蘇東坡はパンダ舎の近くに勤め、家はモノレールの不忍池側の駅の近くにありました」

「モノレールで通勤していたの？」

「そして、これはさすがに想像するにしても無理があると思つていますが、隅田川すみだがわを浅草あさくさの北のあたりでぐいと曲げてやつて、日暮里にっぽりから小石川こいしかわへと流してやると、杭州の南を抜けて東シナ海に注ぐ錢塘江せんとうこうの大河になります。海からの潮が激しい勢いで遡かえりつてくることで有名な川です」

「海嘯かいしようについてはトーパー海から聞いたよ」

「西湖には孤山こざんという島があります。不忍池の弁天堂はまさしくその孤山です。」

不忍池のほとりに立てば、たちまち我が身を蘇東坡の時代の杭州に置くことができるのです。蓮の葉越しに900年前の風が吹いてくるのをまざまざと感じながら……」

「ふーん。叔父さんって、そういう、気を気で養うようなヘンなことができるから、昔の中国を舞台にした小説が書けたりするんだらうね」

「書けはしても、読む人は誰もいません。わたしの想像と波長が合うような人がきつといないのでしょう」

「見たこともない昔むかしのことを想像で書いて、なんの意味があるのかってことはあるだらうね。そういうば、今朝の毎日新聞に、ペリリュー島での激戦を描いたマンガに関する記事が載ってたけど、叔父さん、読んだ？」

「いえ、まだです。朝刊は夕方に読むことにしているので」

「じゃあ、後で詳しいことは読んでもらうことにして、マンガを描いているのは武田さんという漫画家で、42歳なんで、もちろん戦争は経験してなくて、マンガを描くために体験者の話を聞いたりしたんだけど、ある1人の島から生還者を訪ねたときには、話をするのを拒絶されてしまったんだって。後日、新聞記者がその人を取材したところ、『あそこで戦っていない人にはわからない』と。なにしろ壮絶な戦場だったんで、そうには違いないだろうとボクも思うよ。自分で体験したことを語る以上の重みはないしね」

「逆に、ある高名な作家が、自身が体験したことを書いたのなら、文学賞を与えるには値しないといったとか——そんなことを聞いたことがあります。ふたしかな記憶で、その作家がだれなのかも覚えていませんが」

「文学とは想像するにありつてこと?」

「体験していない人にはわからないのか、逆に、体験している人にはわからないのか。魚でないからこそ魚の楽しみがわかるということもあるのではないでしょうか」

「ん？ 魚の楽しみみて、前回のトバー君の詩にあったヤツだよね」

「そうそう。魚はいつもあるがままに泳いでいるだけで、実は自分の楽しみは知っていないでしょう。それを知るのは橋の上から見るそうじ庄子です。どうして庄子は知り得るのか。それを保証するのが、『万殊ばんしゆ一理いちりに帰きす』ということであるの
でしょう」

「もしかすると……いや、もしかじゃなくて、きっとそうなんだろうけど、詩っていうのは、作者の実体験と切り離せないところはあっても、実体験をそのまま記述するものではないんだろうね。それだけだったら詩にはならないよね、きっ

と。

ぼくはあなたを愛す——言葉では言えない、これ以上。

一緒に歩きたい女性は、あなた、

あなたとは絶対離れないでいたい、

語りあいたい女性も、あなた、

あなたこそ、永遠に愛し続けていたい。

(森松健介訳 332ページ)

これって、ジョン・クレアの詩で、一見すると、キザな愛のささやきだよ。だけれど、ここで『あなた』っていつてんのは、だれでもないんだよ。この詩を書い

たとき、ジョン・クレアは精神病院に隔離されていたんだよ」

「ああ、そうなんですか。熱烈な恋の歌に見えて、実はひどく悲しいものだったりするんですね」

『『あなた』『あなた』と何度も呼びかけてはいても、『あなた』はだれともわからないし、その呼びかけにこたえてくれることはないんだよ。空想の世界に、ジョン・クレアはなにかを見ようとしたんだろうね。』

実は、この前は、トーパー君の前でジョン・クレアを持ち出すチャンスがなかったんで、仕方ないから叔父さんを相手に出しておこうかなあってことで、いま無理やりこじいれてみたんだけど、関係なさすぎたかなあ」

「深い関係性があるかもしれませんが……」

「なんかしら屁理屈をコネコネすることはできるだろうね。それで、トーパー君

は詩のなかで自分自身のことをよく詠んでいるんだけど、それって、本物の自分なのかなあって、ふと思ったりするんだ。ジョン・クレアの『あなた』ほどではないけど、詩の世界のなかに、現実にあるそのままではない、なにかしら自分の模型みたいなものを置いているようなことだったりするのかもしれない」

「逆に、現実にあるそのままに自分自身を認識している人なんかいますかねえ」「まあね。そもそも、現実の世界に自分が生きてるってことがあやしいって思ったりすることもあるしね」

「この世はできそこないの模型なのかもしれないね」

* * *

① いきなりのご相談ですけれど、いまからお示しする三つの案のどれがよろし

いか、お選びいただけますでしょうか。

——ん？ メニューをみて選ぶんじゃないやなくて……で、なんのこと？

① 第一の案は、「游たひの奇絶」をお話するのはもう終わりにして、以前通りにもどつて……

——ちよつと、ちよつと、なにいつてんの！ それはホントにいきなりだよ。どういうこと？ もうあきちやつた？

② 2年あまり前に、あなたから「游の奇絶」をお話するように言われ、少なか

らずためらいがあり (第2回) ……

——ごめん！ いやなのに、これまでムリに話してくれてたってこと？

㊦ いえ、そうではありません。

少し説明しますと——老人の自己満足の鼻持ちならない自慢話に陥らないよう、聞いて下さるあなたがほんのわずかでも面白く感じていただけよう、それなりに気を遣ってお話して参りました。ところが、回を重ねるうちに、記憶が次々に蘇り、ついついあれもこれもと、結局のところ、自分が語りたいことを自分のために語るようなことになってしまった気がしてなりません。そのために話がぐどくなり、都から杭州への4カ月間の旅に前回と前々回を費やし、つまり、4カ月

間の旅を語るのに4カ月をかけてしまいました。これから先、ますますくどくどと語るようになって行ったならば、語れば語るほど、「游の奇絶」の終着点は遠ざかってしまうということになりかねません。

——アキレスのカメみたいなもの？ アキレスがカメを追いかけて、距離を半分に縮めて、そのまた半分に縮め、そのまた半分に縮めて……半分の半分っていうのは無限にあるわけだから、いつまでたっても追いつけない。ん？ 関係なかったかな？

㊦ 当初、あなたがご提案して下さったときに期待されていたものとは大きく異なって、老人の自己陶醉の問わず語りに墮して、いたずらに時間を空費するだけ

になってしまっているのなら、ここで区切りを付けるべきであろうと思うのです。どうでしょうか？

——最初にボクがなにを期待していたのかっていうと、いまとなつては思い出せないし、そんなのはどうでもよくて、これからトバー君の話が聞けなくなるとしたら、なんかとてもさびしい気がする。小説だって映画だって音楽だって、具体的になにかを最初に期待して、読んだり見たり聞いたりするわけじゃないよね。読んで見て聞いて、なにか具体的に役立つことがあつてよかつたと思うわけでもない。ボクは、波があればボードをもって海に入りたくなる。それと同じように、ここにくればトバー君の話の話を聞きたくなる。いまはもうそんな感じで、トバー君がいやでなければ、やめないでほしいなあ。自己陶醉だつていいじゃん！ 話

したいことを話してくれていいんだよ。

㊦ 聞いて下さるのは嬉しい限りです。これからもお話したいと思っています。それを無限に続けるわけにはいかないので、有限の時間内に「游の奇絶」を終えること考えなければいけないでしょう。それが第二、第三の提案です。

話す事柄を大幅に減らしましょうというのが第二の提案です。これまでも政治向きのことはなるべく省き、歴史の知識なども省けるものはなるべく省き、私の詩文を軸として、個人的な交遊に絞るようにしてお話して来ました。この先を考えますと、杭州に到着して以降、私の作品数は大幅に増え、これまでと同じ調子で語ると、4カ月の旅に1年も2年もかかるといふことにもなりかねません。世間に流布している私の詩の選集を見ますと、おおむね100首か200首程度の

詩を選んでいきます。それは私の詩のせいぜい1割程度です。これまではむしろ逆に1割か2割を省くだけでありました。やはり、世間の例に倣って比率を逆転させないとならないのでしょうか。

——作品数が増えるということは、それだけトーバー君の技量が高まったか、文学的により豊饒になったということなんだろうから、そうなってからかえって省くものが増えるのってヘンじゃない？ たくさんの詩を聞かせてもらったから、900年も昔のトーバー君の心の動きがよくわかったんで、大幅に減らしちゃったら、きつとつまなくなっちゃうよ。

ト

第三の提案は、例えば4カ月間の旅を4カ月間よりも短い期間内で語るため

に、一晩に語る時間を増やすか、それとも、あなたとここでお会いする頻度を増すか、いずれにしても一定の期間内にお話する量を増やすということです。

——三つの案のなかではそれが一番いいとは思うけど、いくつかの難点があるかもね。叔父さんがよくいつてるように、新しい企画案を最初に東大卒みたいな秀才に検討させると難点をやたらと列挙するだけでなんにも捻らないってことがあるらしいけど、いまボクがその通りのことをしちゃうと、第一の難点は、一晩に話してくれる量を増やすとなると、たとえば、ねずみ男のラーメン屋に行ってもなお語り続けるみたいなことになるよね。そうになると、ボクとしては集中力を持続させて聞き続ける自信がないなあ。酔っ払って、おなかもいっぱいで、夜も遅くなれば、どうしたってボーっとしてくるもの。そもそも漢文の授業は基本眠っ

てたボクだし……。第二の難点は、ケチくさい話で、頻度を増すには、名高い低賃金のギョーカイで働くボクとしては、お財布とよく相談しないとならないかも。飲んだり食べたりするものを半分にすれば回数を倍にできるけど、それもさびしいよね。第三の難点は、叔父さんのことも考えないとならないかもね。トーバー君の話をホームページに載せるために、いまのペースでもう手いっぱいみたいなので。もともと叔父さんのためにとあって、「游の奇絶」を語ってもらおうってことにだったんで、叔父さんは無視できない要素としてあると思うんだ。

㊦ そうなると、三つの案が全て却下というわけで……。弱りましたねえ。

——提案をことごとくつぶす悪役みたいなことになっちゃったけど、あんまし考

えないで、気の向くままに楽しく話すっていうのでいいんじゃないのかなあ。ア
キレスのカメで永久に終わらないのも、それもまた楽しいってことでよかったり
しない？

それでも、やっぱしペースを早めるのは悪いことではないので、ボクが思うに、
ボクがあれこれ口を出すのがきつとネックになってるんだよ。最初から気になっ
ていたんだけど、ボクの不規則発言を叔父さんが削ってくれたらいいのに、その
まま残してしまって、見直すと恥ずかしくてしょうがないだよなあ。だから、極
力黙ってしようって何度も思ったんだけど、アルコールが入るとすぐに抑制がは
ずれちゃうんだなあ。今後はうんと気をつけて、基本、黙って聞くようにするっ
ていうのはどうか？ それならすぐに実行できるし……。

① 私はあなたに向かってお話しているので、あなたがもしもひたすら黙って聞くようなことになったら、語る楽しみが大幅に減じられてしまいます。学校の授業というか、一方的に語りかけるだけの講演会のようなことはしたくないのです。

——黙るというのは実現不能な努力目標なんで、まともに受け止めてくれなくても……それよか、学校の授業のようにしないということでは、いろいろな説明を少なくともするってことはあったりするかも。これまでにトーパー君の話を聞いてきて、たぶんの中国古典の知識がかなり増えたように思うんだよ……いや、ゼンゼンそうでもなかったりするのかな？ そんなでも以前よりは明らかに知識が増えたんで、いちいち説明してくれなくても、なんていうか、類推が働くようなところがあったりするんじゃないのかなあ。要するに、ボクがわからないのではないかと

とかあまり配慮しないで、サクサク話を進めてくれちゃっていいかもってこと。

㊦ あなたに理解していただけないことをお話しても意味がないので、くだくだしい解説を付け加えずにすむよう、詩文の訳し方をさらに工夫するということはあるかも知れません。

こうしていろいろ検討してみた結果、今夜のところは、いままでよりも簡潔に話すことを心がけてみるということくらいでしょうか。さらなる手立てがあるか、おいおい考えるとしましよう。

——ボクとしては、極力、聞く、飲む、食べるに専念するってことだね。

ⓧ それでは前回の続きです。杭州に着いたのは熙寧^{きねい}4（1072）年11月28

日、その3日後の12月1日に休みを得て西湖^{せいこ}に遊びました。西湖というのは、その名の通り、杭州の町の西側に広がる湖です。

天は雪を降らせようというのか、

雲が湖に満ちて来て、

楼台は現れたり消えたり、

山はあたりなかったり――。

水は浅くて澄み、岩が飛び出し、魚を数えられるほど。

林は深くて暗く、人はどこにもいなくて、鳥の呼び合う声だけがする。

十二月一日の今日、

家に帰って妻や子の顔を見ようともしせずに、

道を窮めた高僧を訪ねることを名目として、

自分の楽しみを得ようというのである。

高僧の住まいはどこかと問えば、

ほううんじ

宝雲寺への道は、うねうねと山の中へと入って行く。

この山の名は孤山——
こびん

湖の中に孤絶して立ち、

誰が敢えてこのようなところに庵を結ぶのか。

高僧が住まえば、自ずと道が通じて、人が仏の道を問いに来るから、

孤山は「孤」でなくなる。

高僧の住まいは、

竹の庵に紙を貼っただけの窓であるけれど、

高僧のお近くに身を置けば、

自ずと暖かく感じられ、

葛くずの衣を着て、蒲団の上に座って、眠りに落ちてしまう。

しかしながら、

この寒い天氣に町から遠いところに来て、

私に随う者達は嬉しそうにはしていないので、

まだ日が暮れないうちにと、

帰りの支度をさせる。

山を下って顧みると、

雲と木が一つに合わさって、

寺の上に隼はやぶさが巡り飛んでいるのが見えるだけだ。

今回の遊びはあっさりしたものであったけれど、

歓びは十二分にある。

家に帰り着いて、ぼんやりしていると、

ふつ、ふつと夢が湧き上って来るかのようで、

逃げ行く者を追いかけるようにして、

この詩を作る。

美しい景色も、ひとたび心の内より失われてしまったならば、

後にはなぞり直すことさえできなくなってしまうだろうから――。

――見てきたばかりのことを、忘れてしまわないうちに詩にしておこうというの

は、よくわかる。いまなら、写真とコメントをSNSで発信すれば、それなりの満足が得られるわけだけど。

それはいいけど、着任から3日目に、もう遊び歩いているのって、トバー君って、遊ぶことにかけてはエネルギーがあふれていたんだね。新しい仕事に慣れるのも大変だろうし、新しい住まいを整えるのだからいろいろやるべきことがあるっただろうに。

Ⓣ 家のことは妻と馬正卿はせいけいに任せまして。私がいるとかえって迷惑するようなこともありましたし……

——そういうのって、家事をしない男の勝手な言い訳なんじゃないの。ちよつと

ずるいよね。

あつ、いっけねえ、まったくよけいなことで口をはさんじゃったよ……。黙つて聞く習慣を身に付けないと。

㊦ このときに訪ねた僧をえごん恵勤、えし恵思と言ひ、2人とも詩文に長じ、杭州にいた間に何度も何度も会いました。訳詩では「高僧」としましたが、原詩では「道人」と言っています。道を窮めた人ということです。別の詩では「高人」という言葉も使っています。高い徳を修めた人ということです。

この詩は、杭州に来て初めて西湖を詠んだもので、恵勤や恵思や官僚仲間これを披露するといささか評判になり、ある人がこれに和した詩を作つて下さいました。和すとは、同じ韻字を用いて詩を作ることで、この詩に和すには、一句目

の末尾に「湖」を、二句目の末尾に「無」をとという具合に、もとの詩と同じ11文字の韻字を同じ場所に置かなければなりません。同じ韻字を使ってもとの詩とは異なる新味を出すには、かなり豊富な語彙を駆使する必要があります。ある人がそれをして下さいましたので、私はそれにまた和して詩を返しました。そのやりとりを見てまた別の人が加わって詩を和し、私ももう一度和して返しました。さらに靈れい隱いん寺じとういうところを訪れた際に、興の赴くままにもう1回和し、結局、同じ韻字を用いて4回詩を作りました。

日本語に訳してしまうと、和すということの面白さがわからなくなってしまったので、4つの詩の冒頭の二句だけを眺めていただきましょうか。

天欲雪雲満湖。てん（天は雪ゆきふらせんと欲ほつして雲くもは湖みずうみに満みつ）

楼台明滅山有無。ろうだいめいめつ やまあり な
(楼台明滅し山は有や無きや)

獸在藪魚在湖。けもの やぶ あ うお みずうみ あ
(獸は藪に在り魚は湖に在り)

一入池檻歸期無。ひと ちかん い かえ きうお
(一たび池檻に入りて歸る期無し)

東望海西望湖。ひがし うみ のぞ にし みずうみ のぞ
(東は海を望み西は湖を望む)

山平水遠細欲無。やま たい みず とお こまか な ほつ
(山は平らに水は遠く細にして無からんと欲す)

君不見錢塘湖。きみみず せんとうこ
(君見不や錢塘湖)。

錢王壯觀今已無。せんおう そうかんいまずで な
(錢王の壯觀今已に無し)

解説は加えませんが、末尾に同じ字を置きながら、内容がかなり異なっているということはおわかりいただけるかと思います。

——こういうことをして、トバー君は文学的實力を見せつけたってことかな？
すぐ腕の商社員が、転勤してすぐに大きな商談を次々にまとめてみせて、「さつすがあ」ってみんなにいわせるみたいに……。

㊦ 杭州は非常に魅力的な都市です。その魅力が私に詩を作らせただけで、敢えて人に対して誇るような気持ちはありませんでした。

詩だけではなく、杭州ではいくつかの詞を作りました。前々回お話ししたように、おつやうしめう歐陽脩は宋代の新しい詞を生み出そうと精力的に取り組んでいました。私

も試しに詞を作ったことはあるものの、いま一つ創作意欲をそそられませんでした。それが、杭州に来てから詞に対する意識が変わり、積極的に詞を作るようになりました。杭州での最初の詞を聞いていただきましょう。

これは、年が明けてすぐに雪が降り、その翌朝に、町の東の郊外に出てみての作です。それまで西湖のある西側ばかりに行っていたのですが、その日は馬正卿と馬を並べて東に行きますと、そのあたりの田園の風光が、我が故郷の眉山びざんとも、かつて赴任した鳳翔ほうしょうとも、また都近郊ともかなり異なることに改めて強く印象づけられました。何が違うのかというと、全体としてやわらかで穏やかなのです。このような風光を描写するには詞の方が合っているのではないかと、それでこのように詠んでみました。

昨日出てみましたのは町の東。

試みに探ってみましたのは春の情。こころ

塀の上にしだれかかるであろうと想見されましたのは紅い杏。

花々の芽はまだ内にあつて出て来てはいませんでしたけれど、

早くもここに廻り返って来ている春。

道に漂うのは香るばかりの塵。

雪の後に晴れ上がった前の村。

辛いことも用意しているのが春の神様。

それがあるからこそ思いを高める春の光。

そして神様が吹いてほころばす梅の花。

——そういえば、鳳翔でも、雪の降った朝に、橋の上に最初の足跡を付けようと馬を走らせたという詩があつたよね（👉第8回）。トバー君って、雪が降るとはしゃいじゃう、こどもみたいなところがあるよね。

㊦ 次は、杭州に近い越州えつしゅうを訪ねたときの詩。張次山ちようじざんという人が官舎の西南に建てた寿樂堂じゆらくどうという建物があり、そこで詠んだ詩です。

青い山のきりつとした姿は、

高潔こうけつな人、「高人こうじん」に似ている。

高人は普通はこのこ役所なんぞにやって来たりはしない。

高人はもとから山と縁が深い。

だから高人の庭には招かなくても山が揃ってやって来る。

越州の東側に、竜が伏せるようにして山がわだかまっている。

竜の股のあたりに、越州の町の家屋が薨を並べている。

山に背を向けているなら、山がないのと同じで、

美しい毛皮を裏返しに着るようなものだ。

張君の眼は自然の奥の奥を見抜き、

ここの荒れ地を巧みに拓いて建物に変え、

その中で顎を撫ぜつくつくろいでいるだけで、

越州の秀抜な十の風景の内の五つをここに集めてしまう。

張君は才能が豊かであるのにすべきことが少ないので、

暇であるのを嫌いつつ、

山の上で靄や霧が風や雨に変化するありさまを伏して眺めている。

たけのこ 筍が玉の箸はしのように地面から突き出し、

桑の実かんざしが簪のように連なって穂っている。

張君は無理にも酒を飲み、

山々をミニコに招き入れて、主人として振る舞おうとする。

このような楽しみを、

年少の者が早くから知ってしまうのも悪くはないと思っている。

ただ、恐れているのは、

自然の楽しみを多く取り過ぎているのではないかと、

造物主に訝しく見られてしまうことだ。

春はこまやかにして、

午後の明るい窓辺で眠りが十分に足りると、

ちようどいい具合に入ったばかりの茶があればと張君は思うのである。

——周囲の山々が客人として入ってくるという見立てがちよつとおもしろいかも。それはいいけど、「暇である」というのは、やっぱひねった言い方なんだよね。張君という人も、改革に反対して、不本意ながらも閑職に追いやられて、山を相手に過ごしているってことなんだろうね。

㊦ こうして季節は春の盛りとなりました、杭州市内の明慶寺めいけいじの牡丹を見に行き

ました。牡丹で非常に有名な寺です。

この詩は「史談才子」なので、説明を短く加えておきましょう。昔、ある風流人がいまして、牡丹が咲くと、花を切って、金鳳箋きんほうせんという上質の紙に歌を記し、興平酥こうへいそという菓子添えて親類や友人に配るということをしていました。受け取った人は花が散るまで眺めて楽しみ、その後で興平酥を炙って花を偲びつつ食べました。

静かに降り注ぐ雨、

しっとりと濡れて、

牡丹は清らかに美しく、

御仏に捧げる燈火のように燃えている。

明日は恐らくは花曇りで、

花はなお見ごろを保っているだろうから、

興平酥はまだまだおあずけのままだろう。

——あいにくの雨で、もつと天気がよければどれほど美しかろうと残念がるところだろうけど、視点をずらして、「花より団子」にストップがかかると、そこにおかしみを感じさせた詩なんだね。興平酥ってどんなお菓子なのかなあ？

㊦ 次は杭州の吉祥寺きつしょうじでやはり牡丹を見た詩です。このときは州知事のお供をして行きました。

人は老いると羞はじらいを忘れ、

かんざし

簪替わりに花を差して若ぶろうとする。

花の方では老人の頭に載せられるのを、

きつと羞らっているに違いない。

その上、べろべろに酔って、


人に助けられてやっと帰って来た。

そういえば道沿い十里の間、

どの家も簾が半ば上がっていたのは、

さだめしそんな姿を覗き見て笑っていたのだろう。

——牡丹の花を頭に載せてべろべろに酔って帰ってきたというのは、トバー君
のこと？ でも、トバー君はまだ三十半ばだったんだよね。だったら知事さん

のこと？ 知事さんって、前回、トバー君を窓際族においやるかもしれないと詩に詠んだ人だよね（ 第16回）。

㊦ 私と知事と2人揃ってと理解して下さるのが一番よろしいでしょう。このときの杭州知事は沈立ちんりゅうと言い、私のことを比較的よく理解して下さっていると思つて、このように戯画化して詩に詠んだのですが、実はこのころすでに徐々に距離が開きつつありました。沈立は地方官僚として有能な人で、中央からの指令を忠実に実行しようとしていました。個人としては度量の広い人で、改革に強く反発して都を追われた私を温かく迎えて下さり、私が自由に詩を詠むのに何ら制約を加えることなく見守って下さいました。しかし、それでも内心ではかなり困つていたようです。

例えば、次の詩を聞いて下さい。初夏の頃、やはり杭州にあるれいかんかんのんいん靈感觀音院に行つての詩です。

蚕が成虫になり、

麦の穂が半ば黄色になろうというときに、

前方の山にも、後方の山にも、

後から後から浪のように雨が降り注いでいる。

農夫は鋤をかついで麦畑に出られず、

女は籠をかついで桑畑に出られない。

観音様は好い気なもので、

そんなときにもこの立派なお堂でくつろいでおられる。

最後はかなり露骨に訳しました。原詩は、

白衣仙人在高堂はくいせんになん こうどう あ
(白衣仙人は高堂に在り)

です。白衣仙人とは観音様の別称です。日本で仏教の諸仏と神道の神々が同一視されたりしましたように、中国では仏教の諸仏と道教の仙人が同一視されたりしました。

人々の願いを叶えてくれるので靈感観音と言われているが、長雨に苦しむ農民をよそに、白衣仙人は立派なお堂におさまっていると、もとの詩ではそういう情景を詠んでいるだけで、訳詩には「好い気なものだ」と、あからさまに言葉を

付け加えてみました。

——もしかして、これは観音様に皮肉をいつているだけでなく、実は、改革が民衆のためになっていないっていうことをいつたりなんかしてるのかな？ そうだよな。

ⓧ 沈知事としては、受け止めようによっては自分を批判しているのかと、そう読めないことはありません。そこまで勘ぐらなくても、知事の立場としては、改革を皮肉るような危険な詩はせめて控えてもらいたいと思うのが当たり前でしょう。

私は敢えて改革を批判する意図を窺めて詠んだわけでもなく、また用心して、

いらぬ勘ぐりをさせないよう自制しようと思っこともなく、ただ口から出るままに詩を詠んでいたのです。

沈知事との関係についてはまた後でお話します。

次は、蔡準さいじゆんという人が、ある人に呼ばれて西湖で遊んで詩を詠み、それに和したものです。全部で3首あり、3首とも、幽、秋、洲、浮、留、休という韻字を共通して用いています。今度は同じ韻を踏んでいることが日本語でもわかるように訳してみましようか。日本語としては少し不自然になりますが、お許し下さい。

夏のいま、湖みづうみに漲り溢れる水、

その豊かな幽おほくさかさ。

西からの風が木の葉を落とすのは、

芙蓉ふようの花の秋。

冬には、雪雲が暗く空を塞ぎ、

春には、水から蒲の新芽が突き出るのは、柳の若葉の洲。

湖上の四季は見て見飽きることなく、

人の一生もまたこのように何かに浮かぶ。

顔をほころばして笑うのはそうあるものではなく、

酒があると招いてくれるのならそこに留まろうか。

あなたは見るがいい、

この地にさまよいて来た一人の役人が、

朝に囚人を獄に入れ、夕方には罪を決定しなければならず、

誰かが呼んでくれるのでなければ、

休んではいられないのを。

前半で西湖の四季を詠んでいますが、このときは杭州に来てまだ半年ほどでしたから、半分は想像でありました。「二人の役人」というのは私のことです。罪人の処分を決定するのは副知事の重要な職務の一つでした。

第2首は――

町中の人は実は知らない、

この西湖の幽おくさ。

つまりは、夏の蝉には語ってもわかってもらえない、

蝉が見ることのない春と秋。

だからといって、町中に西湖を置いたのでは、

あたかも山の鹿を無理に遊ばせる水辺の洲。

しかし、道を窮めた高人こうじんは無心であるのだから、

所を得ればしばらく止まり、流れを得ればしばらく浮かぶ。

古い友人や高い位の人も高人を引き留めることはできず、

ただ心に適うのならいつまでも留まろう。

あなたは見るがいい、

官を擲なげつた陶淵明とうえんめいが言うには、

琴に弦がなくても楽しめるし、酒は頭巾に受けたってよいけれど、

客人には引き取ってもらわないと、

酔っても休んではいられないと。

——これって、陶淵明を持ち出しているから、得意の「隠退オチ」のバリエーションの一つなのかな？ 後半はよくわかんなかったけど。

それと、トバー君は、本性は山の鹿だつてことをよくいうよね、トバー君を役人にしておくのは、西湖を町中に置くようなものだったりするのかな？

③ そして最後の3首目です。

田圃の間を流れる引き水、

その音の幽おくふか々。

まだ稲の苗を植え終わらないうちに、

麦はすでに秋。

手を携えあつて竹の寺に遊んで筍を焼き、

下つて船を浮かべるのは蓮の花の洲。

舳先では獲れたての魚を細かく刻み、

船尾では玉のような米を炊く香りが浮かぶ。

風に吹かれてたっぷり食へてゆつたり眠れば、

あえて細かなことなど胸の内に留まろうか。

あなたは見るがいい、

憔悴の時にある壮士が、

餓えては食へることを謀り、
渴いては飲むことを謀り、

功名は時に巡り合わねばならないので、

休んではいられないのを。

——あれれ、今度は、休まずがんばろうって感じ……それよか、「たっぷり食べてゆったり眠る」というほうを重視しているのかな？　そういえば、エピクロスの快楽主義についていつか話すとかかっていつてなかったっけ？　こういうところがエピクロスのだったりするのかな？

日本語の訳を工夫してくれたんで、同じ韻字のセットを使って異なる内容の詩をいくつも作るというのを、トバー君は楽しんでいたんだろうなあっていうのが少しわかったのかも。

Ⓣ

今夜は話を簡潔に進めるという方針を立て、それからは逸脱してしまいます

けれど、人と人との巡り合わせには数奇なものがあるという一例として、この詩を送った蔡準について少しだけ話をしておきたいと思います。

蔡準には、私よりも11歳下の蔡京さいけいという息子がいました。我が父が王安石が国を乱すであろうことを予言したと解釈され得る文章（第12回）を書いたのと同じように、私が蔡京に会って何かしら警告めいたものを書き残していたなら、親子揃って予知能力があつたと称賛されたのかも知れません。残念ながら、そういうことはありませんでした。

私がこの世に別れを告げたしばらく後で、蔡京は権力を掌握し、悪い意味でのエピキユリアンとして、当時の皇帝である徽宗きせう皇帝とともに国家の富を浪費し、北宋を滅亡へと向かわせました。蔡京は王安石の改革を継承することを標榜しつつ、実際には本来の改革の精神が完全に欠落した党派政治を行い、邪魔になる者

を排除し、民衆から激しく収奪したのでした。耐え切れなくなった民衆は各地で反乱を起こし、民衆は心の底から役人を憎悪したために、役人はどこでも残酷な殺され方をしました。こうして国内が混乱する中、朝廷は対外政策でも失敗を重ね、北方に興った金国の南下を誘発し、金国軍は圧倒的な勢いで都へと迫ってきました。そのとき、徽宗皇帝は金国に謝罪する姿勢を示して和睦を図ろうと、息子に皇位を譲りました。新たに皇帝になった欽宗は、これまでの無軌道な政權運営に激しく怒る世論に押され、蔡京ら6人を「六賊」として流罪にしました。世論は流罪では甘いとし、次いで死刑が宣告されました。ただし、蔡京は流刑地でその前に死亡したために死刑にはならず、民衆は残念がりました。蔡京が死んだその年の暮れに北宋の都は金軍の攻撃によって陥落し、徽宗皇帝と欽宗皇帝は捕虜として北に連れ去られ、二度と帰って来ませんでした。皇族でただ1人捕虜に

ならずにするだ欽宗皇帝の息子が皇位を継いで、宋は半分の領土で延命を図ったのでした。

蔡京が政権の中枢にいた時期には、私の詩文を読んでいるだけでも反体制の異端者として厳しく弾圧されました。「六賊」が追放されてから、私の詩文はようやく白昼堂々と読むことができるようになったのです。

私も蔡準も将来このようなことが起こるとはむろん知るはずもなく、杭州では先のような詩を贈り合ったりしたのでした。

——未来のことはだれにもわかんないよね。いまだって、数十年経って見たら、実は富士山が大噴火してここらはもはや人の住めるところではなくなっていたなんてことになっていたりするかもしれないもの。そんなことも知らずに、脳天気

にもオリンピックとかやろうとしていたよなあなんてことになりかねないよね。そうでもなくても、自然災害が多くなっているのは明らかなのになあ。

㊦ 次は6月27日に、西湖の畔ほとりに建つ望湖楼ぼうこうろうで、詠んだ五つの七言絶句です。

望湖楼というのはその名の通り、湖を見渡せる楼阁で、杭州がまだ宋朝の版図に組み込まれる以前にこの地にあつた呉越国ごえつこくの最後の王の銭弘俶せんこうしゆくによつて建てられたものです。

唐とうと宋の間の五代十国の時代には多数の国が分立し、その中では銭氏せんの呉越国は政治的に安定して文化レベルが高く、杭州はその首都として大いに発展しました。その呉越国の王宮が宋の時代には杭州の庁舎として用いられたために、一般の都市の庁舎とは異なる堂々の風格があり、望湖楼を始めとして呉越国時代の遺

構が市内に多数あったこととあいまって、歴史の厚みと豊かさを感じさせました。

では、5首を続けて聞いていただきましょう。

墨をひっくり返したような黒い雲が、

山を遮って隠してしまふより前に、

白い玉がはじけ跳ぶようにして雨粒が船に入って来た。

大地を巻き上げて風が押し寄せ、

たちまちどこかに通り過ぎて行くと、

望湖楼の下にはあたかも青空が広がったのだった。

西湖は放生の池、

ほうじょう

魚も亀も人を恐れずに近寄って来る。

至るところに誰のものでもない蓮の花が開いている。

水の枕にすれば、

山が上を向いたり下を向いたり――、

風に船を任せれば、

月とともに徘徊する。

銭に糸目を付けずに、

黒い菱ひしやら白い蓮あしやらを買い求め、

緑の苳まこむを編あんだ盤ばんに積たみ上げる。

思い出したのは、都のかの有名店で、

新奇的な料理を前にしたときのこと。

こちらにやって来て、

初めておいしいものをたんと食べられるようになった。

粹かなこしらえの橈かい、

花を挿したような妓女の髪飾り、

やわな風に乗って細かな雨が降りかかる。

見渡す限りの岸边かきつはたに咲く杜若。

古いにしえの歌を引いて、

あのあたりに船を寄せようと謎をかけるけれど、

今どきの女性には通じない。

田舎に隠れるのを小隠しょういんと言ひ、

市井に隠れるのを大隠だいいんと言ふ——

まだどちらもできないので、

官職にあつて気持ちだけ隠れるのが中隠ちゆういんだと、

いささかお茶を濁している。

長い暇はしばしの暇に勝るに違いなくとも、

それは得られるものではない。

私には元來定住の家はなく、どこへでも行く。

だからこうして出会えたのだ、

我が故郷にはないこのすばらしい湖と山に。

——へーえ、よほど西湖が気に入ったんだね、故郷にはないとかいっちゃって。

前回、自分の人生は飛ぶ蓬のようだといってたけど、その思想がここにも反映しているんだろうね。

㊦ 飛蓬であるからこそ、故郷にないすばらしい湖や山とも出会えたのですが、

杭州の全てが気に入ったわけではなくて、最初の年はこの地特有の夏の蒸し暑さにかなり辟易しました。

今年の日本の暑さは異様で、38度とか39度とか40度とかの数字を毎日聞かされて、だんだんと驚かなくなりました。2100年には40度超えが当たり前になるらしく、人間はどこまで慣れることができるのでしょうか。

私は7月1日に公務を帯びて船で杭州を発ちました。7月1日は昔の暦では秋の初日に当たりますが、実際にはまだまだ暑さの盛りで、早朝の出発であったにもかかわらず、すぐに汗だくになってしまいました。傍から見ると、船で水路を行くのは涼しいようでも、風がないと湿気が充満して、あまりいいものではありません。

涼しい風よ来ておくれと、

呼んでもちっとも吹いてくれないので、

流れる汗で全身が覆われてしまう。

蓮の間を過ぎるときには、

香りは入って来てくれても、

暑さは変わらない。

眠りたくても眠れないので、

いらついで枕を動かすと、

鯉や鮒を驚かせてしまう。

やたらと欠伸が出るのは昨日の酒が残っているせい、

仕方なく、座り直して川の水で顔を拭おうとする。

空に明滅する星の数は次第に稀になりつつあり、

なお暗い水の上に微かな光が流れる。

火のような夏の暑さは今も勢いが盛んで、

月のしずくの涼しさに洗われるようにはならない。

このちっぽけな身はどこに行こうとしているのか。

東方が明るくなるのを待つだけである。

——夜が明ければ、さらに暑くなるよね。最後の句は、そういうことも含めて、どこへ行くかと、何がこようと、おいらは成り行きに身を任せるぞという宣言であつたりするのかな？ それは深読みかな？

㊦ この出張旅行は杭州から西に出て、さほど遠くないところを順に巡り、途中りんあんの臨安というところにある浄土寺じよとじで中休み入れました。

鶏の鳴き声とともに余杭よこうを発ち、

浄土寺に着いたのはすでに正午。

参禅するほどの熱意はなくとも、

何はともあれ、

腹を満たすお勤めだけは果たさなければならぬ。

腹がくちくになると、

ここのところ眠りが足らないので、

風が入って来そうな庵を急いで片付けさせ、

ぴたりと門を閉じる。

何もかもが静まり返って、

時を測る香の煙だけが真っ直ぐに上る。

目覚めると、

岩の清水を汲んで紫筍しじゅんという名のまろやかな茶を湧かす。

涼しくなつた夕方時分に沐浴し、

髪を梳かすと、毛は衰えて、残りの本数を数えられるほどだ。

詩を吟じつつ門を出る。

村は夕暮れの色に染まっている。

細い月が山へと傾き、

蓮の葉が揺れて互いに露を注ぎ合う。

石橋の上に佇み、

古い友人と夜長を語り合う。

翌朝は、足を伸ばして山房院さんぼういんに入る。

輝く石の鏡が参道に置かれている。

昔この寺を建てた呉越王の雄姿がそこに映されたのだろうか。

今では山の猿や鳥が我が姿をそこに見るだけだ。

世の興廢は嘆き悲しむには当たまるまい——

万世といえども、頭を挙げ下げする間に過ぎ去るものなのだから。

——髪の毛が衰えたっていうけど、いまもまだ結構ふさふさしてるじゃん。このときの心持ちを髪の毛に託して表現したってことかな？ それとも、公務のストレスで、本当に円形脱毛症とかになった？

① 心情表現であると理解していただいてよいと思います。

——えーと、これはやっていいことではない、自分ではこれは違うと思っ

も、仕事としてはやらなければならないというような状況は、かなりのストレスだよ。トバー君はことるときそんな感じだったんだよ。

ボクもネット関係で、ウソなのかホントなのかといったら、ぎりぎりウソかなあみたいな情報を拡散させるような仕事をしていたことがあって、あのころはメツチャ気分が悪かったなあ。その後遺症で、しばらくパソコンもスマホも持たずにいたんだよ。

それで、古い友人ってだれ？ こっちにも知り合いがいたの？

㊦ 橋の上で語り合った相手は実を言うと馬正卿です。その結果として、浄土寺のあたりで、2、3日ゆっくりしようということになりました。仕事だけでなく、暑さのストレスも受けて、かなり疲労が溜まっていましたので。

それで今の詩にあつたように、翌朝に山房院を訪ねたというわけです。石の鏡というのは、参道に大きな黒い岩があり、その表面はつるつるで、鏡のように我が姿を映すことができました。この寺を建てたのは錢鏐せんりゅうという人で、庶民から身を起こして呉越国の最初の王になり、五代十国時代を通してベストスリーに入るような名君でありました。譬えて言うなら、北条早雲ほつじょうそう'unのような人でしょうか。

午後には功臣寺こうしんじに行き、こちらは呉越国ために尽くした功臣の菩提寺として建てられたものです。

葛くずの頭巾に夕日を受け、

羽根の団扇で夕風を入れつつ、

ゆるゆると松の間を歩み行く。

竹林を抜け、ゆらゆら揺れる橋を渡る。

横に連なる峰々を、神が鑿でうがったように、

ここかしこに巨大な岩石が露わになっている。

呉越王が千人の匠たふを使って一晩で掘らせたという千人溝せんにんこう――

その深い崖の遥か下を細い水が流れ下る。

小高い山が寄り集まる奥の方に、

金碧こんへきの甍が輝き見えるのが功臣寺だ。

呉越国を興した錢鏐は、

このあたりの村で荷担ぎをして暮らしていた。

ほんのわずかな食を得るために、

人の股下をくぐるような恥も忍んだという。

山の岩は心なき存在ではない——

この世に稀なる男児の英気漲るありさまに、

屹立きつりつして身を震わせたという。

王となった錢鏐は、万騎を率いてこの村に帰り、

古老を招いて酒宴を催した。

かつて担いでいた荷袋の代わりに錦の袋を用意し、

金の珠たまを入れて貧しい人々に配った。

呉越国はすでに消え去り、

錢鏐の姿はもはや想像するだけ。

いかなる栄華も薄れて消滅し、

世の変転は急使の馬が走り行くよりも速い。

御仏の燈火だけが長く消えることなく、
本堂の内を照らし続けているのである。

——具体的な内容は異なっても、史跡を訪ねると、だいたいだれもがこのようなことを思うものらしいね。要するに「荒城の月」の一つのパターンっていうところかな。

㊦ 次に径山けいざんに遊び、さらに長い時間の流れで世の廃興について詠んだ詩があるのですが、学校の授業のようなことはしないとという方針に従って、それは省略します。

その後で公務に戻り、次の出張先に行くと、その役所に呂仲甫りよちゆうほという人から

の詩が届いていました。呂仲甫は呂蒙正りようしょうせいの孫です。呂蒙正は宋代に入ってから実施された科挙の合格者として初めて宰相になった人です。つまり、宋の時代の士大夫したいふはこうあるべきだという最初のモデルを作った人です。譬えて言えば、伊藤いとう博文ひろふみみたいな人でしょうか。

呂仲甫の詩を読んで、普通なら同じ韻字を使ってすぐに詩を作って返すところですが、思うところがあって、一連の仕事を終えて杭州に戻ってから書いて送りました。出張から帰れば、当然のことながら、すぐに庁舎に顔を出して知事に報告しなければなりません。しかし、私は西湖の畔に留まり、詩を送って呂仲甫をそこに誘い出そうとしました。

貴君は貴公子であって、

素敵なことに、

女性を愛する以上に山を愛している。

貴君の心はいつでも一葉の舟に乗って旅に発とうとし、

夢はいつでも千の青い山々を巡っている。

貴君の新しい詩を道の途中で得て、

嬉しさの余り下駄の齒が折れたのにも気付かずにした。

お上に仕える者は、

地位を得れば失うのを恐れ、

地位を得られなければ悲しむのを常とし、

数代にわたって官職から離れなければ、

裸足はだしで自在に山を歩けるようにはならないものと、

昔から相場が決まっている。

私は仕事を終えて帰って来たものの、

役所に戻る気がしなくて、湖の畔でうろろうろしている。

役人としての地位の上昇下降など気にもしない。

長官に叱られることも恐れない。

思うところへ飄然と行こうとするだけだ。

そうした気持ちを共有してくれる友がいてくれるのを切に願う。

だから、貴君にもしも湖上で一緒に遊んでくる気があるのなら、

今すぐに町を出るなら、暗くなる前にここに来られることだろう。

——えーと、具体的にどうという仕事をしてきたのかってことは聞かなかつたけど、

要するに不本意な仕事だったんで、報告する気分じゃなかったってことかな。湖畔でぐずぐずして役所に行かなかったのはいいとしても、そこに人を誘い出していいもののかなあ。

㊦ おっしゃる通りです。呂仲甫は良識的な人でしたから、湖畔には現れませんでした。私は望湖楼で夜を明かし、もう一首、同じ韻を用いて詩を詠みました。

月は天性の美人に似て、

東の海から出てすぐにすでに艶やかである。

湖の上へと来て、さやさやと光を注ぎ、

空にも水にもさざざ波が広がる。

夜の涼しさにまだ眠らぬ人がいて、

静かな山辺に下駄の音がこだまする。

詩を詠む人はもとより感じやすく、

秋を悲しみ、さらに恐れ慄く。

貴君はどうして来てくれないのか。

貴君を待つうちに、

我が詩稿は墨やら朱やらでぐちゃぐちゃになってしまった。

今回の旅では想うところがあつて、

十日の間、家のことを忘れていた。

ただ残念なのは思いを共にする友人がいないことだ。

だから、詩が出来てあつてもそれを指摘もらえない。

貴君が来てくれて試しに詩稿を吟詠してくれるなら、頭を垂れて感じ入るような詩に仕上がることだろう。

そんなわけで、この詩は書いては消し、消しては書いた結果、紙いっぱいに、蚯蚓やら蛇やらがのたくっただけのものとなってしまった。

——たぶん、ここでいいたいの、いい詩ができるとかどうかということではなくて、今後官僚としてどう生きてらいいのかといったことを、語り合いたかつつてことなんだろうね。名門の貴公子であるから、何かいいアドバイスを得られるかもと期待したんだろうね。

①

私は、自分のことは自分で始末を付けるしかあるまいと、望湖楼から船を出

し、湖の上で自分と向き合い、五首の七言絶句を詠みました。

新月には魄はくがあり、その姿は不安を感じさせる。

五、六日ほどすると、ようやく光が満ちて来る。

今夜は艶やかに半分たまの壁のようになり、

湖に遊ぶ人は夜中に至るまで月を見ていることができる。

夜中に向かって月は次第に垂れて行き、

落ちようとして落ちないときの光景がことに好い。

人間界において明日何が起こるかなど誰も知りはない。

そうりゅうせい
蒼竜星せいが西に沈むのを見つめるだけである。

蒼竜星がすでに沈むと牛宿、斗宿が横たわり、

北極星が天球を回して東に金星を昇らせる。

漁師は暁になる前に釣り道具を収め、

その船が行ってしまうと、菰や蒲に寄せる波音だけがする。

菰や蒲が無限に続き、水が茫々と広がる。

夜のうちに蓮の花が開いたのか、風も露も香りを含む。

遠い寺に燈明が掲げられたのが見える。

月がすっかり消えるのを待って、「湖光」を見ようと思う。

「湖光」は鬼が成すのでも仙人が成すのでもない。

風が安らかで波が静かになると、川に光が満ちる。

それが二つの流れになって湖の中へと入って来る。

そして孤山に向かうのを目で追うが、たちまち消えて虚しさに茫然とする。

蒼竜星、牛宿、斗宿は星の名前で、現代でいうどの星に相当するかということ
は特に説明しなくてもよろしいでしょう。西湖は放生の池で殺生を禁じていたの
で、漁をしていたのは密漁船です。だから夜が明ける前に姿を消すのです。淡い
光が湖水の上に広がって見える「湖光」の正体は不明です。

——そういえば、5月か6月ごろに、湘南海岸のどこかで海が光る現象が見られ

たつてことがあつたよね。夜光虫なんだよね。


それで、西湖で夜を明かして、役所のほうはどうなったの？ 叱られた？

㊦ 夜の間の自然の動きに心を洗われたと言いますか、人間界の小さなことで気を病むのはつまらないとある種の見極めが付き、翌朝には役所に出向き、型通りの報告を行いました。知事は無言のまま聞き、1日遅れたことについては何もなく、それで終わりでした。

——なんだあ、なんにもなかったんだ。

㊦ この後まもなく、私は科擧の地方試験の監督を命じられ、8月の半分を州の

役場で寝泊まりして過ごすことになりました。どこかの国の医大で裏口入学があったとか言われていますけれど、科挙は不正が一切入り込む余地のないよう極めて厳密なルールのもとに運営され、試験期間中は試験に関係する官員は家に帰ることも許されず、合格発表が終わるまで「試院^{しいん}」という建物に缶詰めにされたのです。

——そういえば、試験の監督をしたってことをずっと前に聞かせてもらったよね。それってこのときのこと？ 改革に伴って試験のやり方を変えたのが気に入らなくて、ふてくされたような詩を詠んだんだよね  第4回。

① すばらしい記憶力です。その通りです。

——ほめらると困るんだなあ。実はつい最近、そのころの話を読み直したばかりなんだ。どうしてかっていうと、新しいパソコンを買ったからなんだけどね。さつきいったみたいに、パソコンもスマホもない時期がしばらくあって、叔父さんのホームページもろくに見てなかったんで……。

㊦ 私は都にいた間に、改革に伴って科挙まで変えることに強く反対しました。しかし、官僚の一員であるからには、任務を与えられたなら、試験監督であろうが、それはそれとしてきちんと果たさなければなりません。杭州に来て以来、そうした葛藤に常に悩まされたのです。

この試験監督の仕事には、それとは別の悩ましさがありました。杭州で何が有

名かと言いますと、8月の大潮のときに銭塘江せんとうこうを激しい勢いで遡る潮、すなわち

かいよう

海嘯です。杭州に行くのはそれを見に行くためだと詩に詠んだくらいで **(下) 第1**

5回、いよいよその時期が巡って来ると楽しみにしていたのですが、この年の大潮は8月18日で、その日までに缶詰めから解放されるのかどうか……ただでさえ気の進まない仕事なのに、そのためにつつかくの海嘯が見られなくなったのは踏んだり蹴ったりです。

——ははは。遊びを重視するトバー君らしいなあ。

(ト) そこで、私は「試院」において、同輩に向かって次のような戯れの詩を詠み
ました。

八月の十五夜は、

どこでも月の色のよさは変わらない。

田舎の茅の軒端であろうとも、

都会の楼阁であろうとも、

ほうらいどう
蓬莱島の仙宮にも譬えられる立派なきこの官舎であろうとも。

ほうしゅうどう
構内の鳳唼堂の前では橘の実が香り、

けんたんきょう
剣潭橋のほとりでは蓮の花が枯れかかり、

ことに味わい深く月を見ることができるだろう。

八月十八日は大潮、

海嘯の壮観は天下無比で、

かの大魚が鵬おわたりに化して、翼で撃つて飛び上がるときに三千里の水しぶきか、

はたまた、かの楚その大王が呉に攻め込んだときの十万の軍勢が長く連ねた白い布か。

見物客が、赤い旗やら青い蓋かさやらをぎっしり並べて待ち構えるところに、

それら呑み込んでしまおうと、

白い浪が黒い砂を巻き上げて押し寄せる。

人生においては一つのチャンスをものにするのも難しい。

十五夜と海嘯の二つとも心ゆくまで見たいものだ。

さあさあ、諸君らは蠟燭ろうそくを二重にも三重にも接ついで、

せつせと採点の仕事に励んでくれたまえ。

門の外には合格発表を待ちわびる受験生が、

鶴のように首を長く伸ばして待っていることでもあるし。

——遊びのスケジュールに合わせて、仕事はさっとすませるといふ、実に正しい態度だね。

㊦ この詩を仲間に見せますと、官舎群の中にある望海楼ぼうかいろうに登れば、その名の通り海が見えるだろうから、海嘯も見えるのではないか言い出す者があり、ならば早速試してみようと、私が知事に申し出ると、あっさり許可が下り、一同連れ立って望海楼に登りました。それはまだ8月の上旬のことでした。

しばらく試院に閉じ込められていたので、外に出られただけで嬉しく、楼閣の上から遠くを見晴らすと、本当に気分がせいせいしました。そして、潮が川を遡って来る様子も見ることができました。勿論本番には遠く及びませんけれど、そ

のことを詠んだ詩——

海の上に波頭が一本の直線となって現われ出ると、

すぐに望海楼の下にまで、

雪を堆く積んだような潮がやって来た。

潮が上り来る時には必ずこの楼に登るようにしたいものだ。

銀色の山のような潮を、二十回を数えるまで見てやるのだ。

——20回って、どういうこと？

①

潮は日に2回の満ち引きがあり、20回で10日間、それでちょうど大潮に

なるという計算です。実際には、望海楼に登る特別許可はこれ1回限りでした。

この時の詩は5首あり、あと2首だけ聞いていただきましょう。

横風に吹かれて雨が楼の中へと斜めに入って来た、

雨と潮が織りなすこの壮観を好い句に詠んで誇るべきではないか。

雨が通り過ぎ、潮が平らになって、川と海が青さを取り戻したとき、

電光が走って、紫金しきんの蛇が天空に貼り付けとなった。

青い山々が連なる縁へりに、望海楼とともに幾つもの塔が建ち、

岸を隔てた向かいの人家は呼べば応えてくれそうである。

川の上の秋風は夕方に向かって強くなり、

山の寺の鐘音を遠く南の町へと伝えて行くであろう。

——へーえ、ちようど雷雨があつたんだね。蛇が貼り付けになつたつていうのは、
稲光のこと？　へんなたとえ……。

① 8月10日には、ちようど1年前に陳州ちんしゅうで弟とその同僚さらいどの崔度と月光のもと

で語り明かしたのを思い出し、詩を詠みました。そのことは前にお話しています
② 第15回。詩の一部をもう一度申し上げますと——

去年の今日は、

夕方にふらりと立ち寄ってから、

柏の木の彼方に冬の星座が昇り来るまで、

三人で過ぎこしたのだった。

えんきゆう

えんどう

宛邱先生は山盛りにした豌豆をぼりぼり食べ続け、

崔先生は恐ろしく赤い色の酒をぐびぐび傾け続けた。

今年もまた去年と同じ月を見て、

二人の先生は露の冷ややかさに感じ入っていかうかと、

遥かに思いを寄せる。

——そうなんだ、この詩は、役所に閉じ込められていたときに詠んだものだったんだ。1年前の旅の間は自由の身であったと、しみじみ思い出したってことだね。

㊦ 試院に拘束されてはいても、そこそこ暇な時間もあり、お茶に一言ある同輩に、お茶の立て方について細かく教わったりもしました。その時の詩を聞いていただきましょうか。特殊な用語が幾つかありますが、なんとなく聞いていただくのでよろしいかと思えます。

湯の表面に立つ泡の状態が「蟹眼」を過ぎて「魚眼」になると、

しゅうしゅうと「松風」の音となる。

すり鉢の中で、細かい珠を連ねた「蒙茸」の様になった茶葉を取り出し、軽やかに雪が飛ぶように甌のまわりを巡らせる。

銀の瓶へいに湯を注ぐのは天下第二の法とされるやり方。

茶を煎れるのではなく水を煎れるのだと古の人が言ったことの意味は、

私にはまだわかっていない。

皆は知っているだろうか、

昔の李先生は自分で客人に煎れるのを好み、

炭火を「活火」に、湯を「新泉」の状態にするのを貴んだのを。

皆は知っているだろうか、

近時の茶の名手の潞公は、煎茶は「西蜀の法」を学び、

定州で造られた花の模様の瓷を用い、

それに紅玉を散りばめたのを。

私は今貧病で長く餓えに苦しむ身であるから、

美女が捧げ持ってくれるような玉碗などは無論ない。

ささずめごく一般的なやり方を学んで、

「茗飲めいこん」とやらを為そうと思っくくらいで、

瓦や石でこしらえた粗末な道具で、

しばらくは満足しようというのである。

ある人が御大層にも、

三椀の茶を飲めば、それが腸に入った先に五千巻の書物があると、

言ったらしいけれど、

私の腹には何もないので、

一杯の茶によって睡眠が十分に足りて、

昼まで寝ていられるのを願うだけだ。

——いろいろわかんない言葉があるけど、お茶のお流儀についてここで解説して

もらうと長くなっちゃうから、なしでいいよね。

要するに、適度なカフェインを得て、いい眠りにつくのがお茶の効用だったのが、この詩の主題だったりするのかな。漢文の授業中に眠ってばかりいたボクとしては、この詩を覚えていて、居眠りをとがめられたときに、こういう詩がありますということができたら、先生もびっくりこいただろうね。自分ではなんのこともかわかっていなくても、専門用語をいっぱい並べると、偉そうな感じになるしね。

Ⓣ 合格発表は大潮の前日の8月17日に行われ、試院から解放された私は早速望海楼に登って潮を見ました。そのときの詩もありますが、それは省略します。

さて、杭州に到着した12月から始めて8月までお話して来ました。前回まで

よりかなりスピードアップできたように思います。ただ進行を意識するあまり、弟に送った詩を漏らしてしまいました。

——えーと、前回の終わりに、弟さんに送った詩を聞かせてもらっているけど。

ⓧ その詩では、これから地方官としてやっていけるものか、赴任直後の不安な気持ちや弟には包み隠さず示しましたが、その後で、気弱な言葉を口から出すと、それに引かれてより気弱になってしまいかねないと反省し、すぐにまた別の詩を詠みました。

弟は丘のように背が高く、それで、さきほどの8月10日の詩にありましたように「宛邱先生」というあだ名を付けのは、前にお話しています。

えんきゆう

宛邱先生の背の丈は丘のように高いのに、

宛邱先生の学び舎やは小舟のようにちっぽけである。

立って書物を音読するときには頭を低く垂れなければならず、

ふいに欠伸あくびでもしようものならごちんと天井に頭を打ち付けてしまう。

風が吹くと、カーテンがまくり上がって顔に雨が降り注ぐありさまで、

傍らの人は気の毒がつてくれるが、

宛邱先生には意いに介かするところがない。

大飯食らいの独活うどの大木と笑われようとも、

雨に立ちん坊の案山子かかしと笑われようとも、

宛邱先生は気にしない

眼の前でごちやごちやいさかいが起こっても、

目、耳、鼻、口、心、知の六つの穴の自然なコントロールができているから、

宛邱先生は天に遊ぶ心地でいられる。

宛邱先生は一万冊の本を読んでも、その中に実務書はないので、

皇帝陛下が堯ギョウや舜シュンの政治をなさるお手伝いをする技術を持っていない。

世間には勤労を促す指令が飛び交っているけれど、

宛邱先生は塩をふった葦アシさえあれば十分だと、

のんびり老年を迎えようとしている。

門の外で何があるうと目をくれず、

頭を垂れて書物を読むだけで、

気持ちは少しも屈しないのである。

ところが、杭州の副知事様ときたら、

何の功勞もないくせに、

長さ五丈の大きな旗を振り回せるくらいの大広間に大胡坐をかき、

屋根は遙か上にあるから、雨音などは聞こえないし、

部屋数がやたらとあるので、屋内で風が渦を巻くくらいだ。

これまでは顔を赤らめてできなかつたことも恥じることなく行い、

疲れ切った民衆に平然と鞭打ちの刑を食らわせている。

道で威張りん坊の政治屋に出会えば、

へいこら挨拶し、

心の中ではよろしくないと思っても、いそいそ言い付けに従ってしまう。

暮らしは高く、その代わり志は低くし、

それで何がいいのかというと、

意気を縮小させて、残らず消し去ってしまおうというわけだ。

文章を書くなどはごくごくつまらない技で、

世の模範となるようなことはないと見切ってしまった。

宛邱先生と副知事様はもとは並び称されていたのだけれど、

二人はそれぞれに「こんなみともないありさまになって、

はてさて、どちらがましなのか、

もののわかる人に判断してもらいたいものである。

——これって、「賢弟愚兄」の自虐ネタ？　こんなふうにマンガチックに自分をスケッチできるのっていいよね。「暮らしは高く、その代わり志は低く」なんてサイ

コーだね。なんなら、ウクレレもって、〜あかるく陽気にいきましよう〜って、「ぴろき」のまねして、もつともつと自虐ネタにみがきをかけてくれたらうんとおもしろくなるかも。うちの叔父さんは「ぴろき」の大ファンだから、きつとよろいぶよー！

㊦ この詩で、「鞭打ちの刑を食らわす」とあったのは、罪人を裁くのは副知事の仕事のひとつだったからです。

この詩を弟に送った後の大晦日のこと、私は役場に残って仕事をしていました。牢獄には、明日は元日だというのに、裁きが決まっていない罪人がたくさんいました。少しでも罪を軽くし、早くに解放してやることができないかと、訴状を調べ、判決文を書き続けるうちに、結局は徹夜をしてしまいました。その途中で次

のような詩を壁に書き付けました。

大晦日には早くに家に帰りたいものだ。

しかし、公務があつて役所に留まらなければならぬ。

筆を持ち、書類に向かつてふと涙をこぼす。

哀れではなかるうか、ここに繋がれている囚人たちは。

法の網に落ちるのを恥とも思わず、

ただただ食うためにしてしまったのだ。

私だつて食うために、わずかな給与が恋しくて、

ぐずぐずと故郷に帰れずにいるのだ。

どちらが賢くてどちらが愚かということはない、

同じく食うためにしているだけなのだ。

せめて正月の間だけでも、

囚人たちを家に帰してやりたい……

昔そのようなことを実行した立派な人々に恥じ入るばかりだ。

——トバー君って、弱い立場にある人のほうに視線が向いてるなあつてことがあるよね。

さつき、裏口入学のことをいってたけど、それをした文科省のおえらいさんは、新聞によると、「上に従順で下に厳しい、ある意味、典型的な官僚」とか書いてあって、だから出世頭だったんだとき。超サイテーじゃん！ こんなヤツこそ一生監獄に入れておけばいいんだよ。トバー君は、パワハラ知事さんともめたときも、

「上に従順で下に厳しい」というのとは逆だったんで、そういう人は信用できると思うんだよなあ。

㊦ 翌年の春、弟から近況を記した詩が送られて来ました。それに和したのが2首ありましたが、1首だけ――

陳州の名所、太昊祠たいこうしの東、鉄墓てつぼの西に、柳湖りゅうこがある。

かつて一樽を携えて君とそこに遊んだ。

振り返れば、南に、官舎の欄干が連なり、

前を見れば、北に、船の帆柱が突き出していた。

この時、僕と君とは二羽の水鳥のように、

豆を啄^{つば}み、草の実を食^たべたのだった。

空にかかった虹の下で、川の水を飲んで吐き出してみたら、

昔からの言い伝えの通りに雨が降ったものだ。

僕ら二人のこの楽しみはこの時限りで、

それからは雨が降らなくなつて、

柳湖は涸れてしまったと君は言う。

湖畔に山茶花^{さざんか}の花が咲いても、

僕がないので、君を堤へと誘い出さすのは、

花の下でころころと鳴く鳥だけなのだろう。

「ここですいでに言っておきますと、ちようどのこの詩のやりとりのあったところに、

三男の過かが生まれています。

——えーと、新しい奥さんの2人目の子だよ。男の子ばかり3人ってことかな。

㊦ 先程漏らしてしまったことをもう少し補います。いまの詩と同じころに、趙

概がいという、このとき80歳の人おうえりやうしゆうが、歐陽脩の隠居場所を訪ね、1カ月ほど滞在し

ました。2人は同じ時期に朝廷にいて、通じ合うものがあり、趙概としてはこれが会える最後という思いで、老齡にもかかわらず出かけて行ったのです。趙概が泊った建物に歐陽脩は「会老堂かいろうどう」と名を付け、2人はそこで詩を詠み合いました。それらの詩に私も和しましたので、その中から1首だけ聞いていただきました。

よう。

欧陽公の朱塗り門には、

訪れる人もいないので、

啄木鳥きつつきの突いた穴が開いている。

そこに千里の彼方から飛び来る燕のように、

趙公がやって来られた。

趙公が百回呼んでも、

欧陽公の家は氷のように静まり返って、

返事がなかった。

欧陽公は昨日と変わらずに趙公を迎えたけれど、

日頃の親しい友の半ばは世を隔ててしまっているので、

こうして二人が向き合うのを見て、

傍らの人は驚かずにはいられなかった。

近頃では、世間の人は、濃い酒のようにべた付き合っているけれど、

真の友情は春の雲のように淡いものである。

二人の声は凛凛^{りんりん}として和し、

しかし、互いに相手に合わせようとしているのではない。

長く心は親しんでいても、

上辺を揃えようとはしない。

二人の白い髪と白い髭が向き合うのは、

松の間に二羽の鶴が佇むかのようだ。

二人がやりとりする清らかな句は、

雪の中でおどろ鴻が鳴く声のようだ。

いつしか私もお二人のような自由の境地に至りたいものだ。

——よくわかんないけど、最後はいつもの「隠退オチ」ってことかな？

Ⓣ もとは「史談オチ」と「隠退のオチ」の合体したものでありました。煩わし

い説明を省くために、「史談オチ」の方は訳文ではカットしました。そのためにはつきりしない結びになってしまいました。「史談オチ」でははんれい范蠡の故事を用いてい

ます。都を出た直後に、私が范蠡のように商人に戻ることを長男が夢想したと、

そんな話をしたのを覚えておられましようか (📖 第15回)。

——そういうことがあったかもね。歴史上の人物名はすぐに忘れちゃうんだよななあ。こんなことでは、蘇東坡検定一級も返上しないとだめかも。

㊦ このときはお元気であった欧陽脩が、3カ月余り後の閏7月23日、つまり私が試験監督として缶詰めになる直前に、亡くなってしまいました。66歳でした。

——ああ、そうだったんだ。前回、これが会うのが最後だったって話していたよね。そのことは忘れずに覚えていたけど、1年くらいで大恩人が亡くなってしまったんだ。トバー君としては、悲しかっただろうね。

㊦ 言葉では言い表せないものがありました。実際に言葉にならなくて、試験監督の仕事が終わってしばらく経ってから、欧陽脩を祭る文をようやく書くことができました。それを孤山の寺に納め、恵勤、恵思に二人の僧に経を詠んでもらいました。恵思は欧陽脩の死を悼む詩を作って見せて下さり、それに和したのが次の詩です。

親しくさせていただいたかの人土となり、

我が髪は秋に驚いてさらに衰えようとしている。

それでも孤山のもので、

かつての交流を語り合えるのは嬉しいことだ。

そして祭文です。

嗚呼ああ、哀しいかな。

公がこの世に生きておられた六十六年の間、民には言うなれば父母があり、国には命運の傾き度合いを測定する天秤があり、道義には正しい指針があり、学ぶ者には師匠があり、君子には拠り所があつて恐れを抱くことなく行動でき、小人には畏れる所があつて何かをしでかすことができなかつた。一つの譬えを言うと、大河や高峰は何かの動きをしているようには見えなくても、その影響は万物に及び、それがもたらしめている効能の全てはとても数え尽くすことができないのである。

今や公が亡くなられてしまい、天下の赤子には言うなれば仰ぎ見て庇ってくれるも

のがなく、朝廷には迷いから抜け出る羅針盤がなく、道義は数々の異端だらけとなり、学ぶ者は異界に師を求め、君子は善を為そうと努めなくてもよかろうと思うようになり、小人はついに我等の時が来たと勇み立つようになったのである。一つの譬えを言うと、深い淵や広い原から竜が消え虎が去ってしまうと、様々な変化や妖怪どもが雑然と出て来て、泥鰌やら海蛇やらが飲み舞い、狐やら狸やらが飲み叫ぶのである。

昔、公がまだ朝廷に用いられずにいた頃は天下は病み、公が用いられるとそれが遅すぎたのを残念がり、公が朝廷から去ると再び用いられるのを願わない者はなく、公が老齢をもって隠退すると人々は望みを失ってがっかりしたのだった。それでも万に一つ、また用いられることがあるのではないかとの望みを繋いだのは、幸いにも公がまだまだ衰えずにいたからである。誰もが、公がもはやこの世に思いを致すことがなく、たち

まち去ってしまった、その後を誰も追って来させないようにするとは、思いもしなかったのである。あるいは、世の混濁を嫌って、身を潔くして行ってしまったのだろうか。はたまた、もはや民には福がなく、民には何も遺さなくてもよいと天が定めたのだろうか。

昔、我が父が大切な物を内に秘めたままこの世を去ってしまったからは、公がいなければよく教え導いて下さる人はいなかった。この不肖者、このふつつか者は、縁があつて公とお近づきになれ、その門下生として教えを受け、ここに十六年となる。公の亡くなったことを聞いて、道義としては這つてでも葬儀に参上しなければならぬのに、俸給が大切と行かずにいる。何よりも道義を重んじた古の人に恥ずかしく、忸怩たるものがある。

私にできるのは、この祭文に我が思いを封じ込めて千里の彼方に送ることだけである。

その思いのつまるところは、大きく言えば天下のために慟哭し、小さく言えば私一人のために泣くのである。

嗚呼、哀しいかな。

——そっかあ、大恩人の葬儀には行けなかったんだね。交通が不便なのはゆつくり長い旅ができていいこともあるって話をしたけど、こういうときは困るよね。

㊦ 我が父は、官僚としての地位はごく低いものであったにもかかわらず、亡くなったときには数多の著名人が弔問に来て下さいました。その理由は一つしかありません。欧陽脩が我が父を高く評価して下さいましたからです。欧陽脩がもしも都で朝廷の高い位に就いたまま亡くなっていたならば、天下の士は挙ってその葬儀

に参列したことでしょう。陽脩の葬儀は退隱の地において近親者によってひっそりと営まれたのでした。

——そっかあ、想像するに、もしもトバー君をはじめとして、歐陽脩に親しかつた人たちが葬儀に集まったりしたなら、改革に反対する人たちが顔をそろえることになって、お偉いさんたちにとっては相当に不快だったろうね。

ⓧ この当時、改革派は政治的緊張を一つ乗り越えたと見ていたようです。改革に反対する人たちはほとんどが都の外に出て、批判の声はかなり沈静化していました。改革派は早く成果を挙げようと急いでいました。改革が実効性を持つようになれば、改革に反対して来た人たちを完全に黙らせることができます。私にし

でも、官僚の一員として、矛盾は感じつつも、中央の指令に従って改革の実行部隊として動いているので、改革がもしも実際によりよい結果を生み出すのであれば、それを担った者として、改革の果実をより大きく稔らせることを我が仕事として責任をもって取り組んで行くということになるでしょう。もってまわった言い方で、日和見主義と批判されるようなことであるのかも知れませんが、何が国家や民衆のためになるのかという判断は、事の推移とともに変わります。一つの主張をかたくなに守り続けるよりも、現実在即してその都度柔軟に対処すべきであるというのが私の基本的な姿勢でした。改革派は、そういった柔軟な良識を持った官僚であれば、改革が進行するにつれて体制に組み入れて行けると考えて、完全に阻害することなくそれぞれに職務を与えたのでしよう。

私は改革の実務に携わり、そこで見えて来たのは、政策の大転換によって、た

ただただ右往左往させられている民衆の姿でした。改革は始まったばかりです。社会に大きな混乱をもたらしていました。

先の出張旅行から帰った後で、この目で見て来た幾つかの問題点を知事に報告しました。知事からは何の反応もなく、私が試験監督の仕事で缶詰めになっている間に、知事は任期を終えて杭州を去りました。恐らく、知事としては自分のいる間は波風が立たないようにということであつたのでしょう。

——ははは、いかにもありそうだね。

そういえば、叔父さんから聞いたんだけど、うちに施設に以前きていたデイの利用者さんで、「俺には怖いものはない。どれだけ喧嘩したかわかんない」と、いつも自慢している人がいて、かつての勤務先で暴力をふるうようなこともよくあ

つたらしいんだ。だから、会社のなかであちこちの部署にたらいまわしにされて、その人が来ると、その部課長は、自分のところにいる間は、とにかく何事もないうようにと、ひたすら穩便にすませようとしていたんだって。トバー君も、そんな感じにみられていたのかなあ。

㊦ 知事の送別の宴には私は試院にて出席できず、そこで知事が詠んだ詩に後から和して送りました。その詩は――

いま杭州の民衆が千粒の涙をこぼす光景は、

公が杭州に来られた時に、

公の前任地で見られた光景の再現に他ならない。

公がここに遺した愛の形を、

碑文に刻むようなことはしないのがよいだろう。

いにしえ
古の真に徳のある人は、

自分の行為が世間に知れるのを畏れたのだから。

これは「史談才子」の一つで、ここは解説を加えておきたいと思います。

昔、晋しんの時代に胡威こいという人がいて、徐州じょしゅうの知事として大変評判がよかったの

で、皇帝は胡威を都に呼んで褒美を与え、「そなたの父も清廉な知事だったと聞く。

そなたと父とでは、どちらがより清らかであるのか」と尋ねました。胡威は、「私

は到底父には及びません。父は自分の評判が人に聞こえるのを畏れておりました

が、私は自分の評判が広く人に知られないのをいつも畏れております」

——なるほどね、有名になりたいか思っているようでは、本物ではないってことかあ。

もしかして、いまの詩は、二通りの読み方があるんじゃないのかなあ。知事さんは本物の方だと称えているというのが一つで、もう一つは、知事さんのご立派な仕事を碑に刻んで残そうとかいう動きがあつて、知事さんもまんざらではないと、それに対してチクリといつてやったという……ボクってひねくれてっから、そういう解釈をしたくなってしまうんだけど。

㊦ 詩は2首あり、もう一つの方も聞いていただきましょう。

役所に居続けの私は、

遠くで鳴り響く銅鑼や太鼓の音を、

公の船が発つのを見送っているのではなからうかと、

寢床の内で聞き、

夢の中で公と別れの觴を交わしました。

別れの愁いがどれほどのものであったかと尋ねられましたら、

川の水を何万杯汲んだところで私の涙には足りないと言えましょう。

——うへっ、おおげさすぎ！　なんかしらじらしくない？　要するに、知事さん

とは、齒の浮くようなお世辞をいうだけの関係だったってことだよね。

㊦ 科擧の地方試験が終わって、秋もすでに半ばとなり、秋の思いを詠んだ「秋懷」しゅうわいの詩を作りました。

ひどい暑さの頃は、秋の風が立ってくれるのを念じつつ、

ひよっとしたらもう吹かないのではないかといつも恐れさせました。

今ここに凜りんとした清涼な風が吹いて来ると、

また一年が過ぎ行くのかとの悲しみが湧き上がって来る。

夜になり、寢床で蟋蟀こおろぎが鳴き出したので、

起き上がって窓辺に寄ると、

黄色く染まった葉が飛んで来た。

それは梧あわきりの葉で、

冷たい露が降り下るいまは、もはや枝には残っていないのだろう。

夜空に不気味な声を立てるのは、

軒端近くに棲みついた梟だ。

梧の木を好んで住まいにするという鳳凰は、

安らかな眠りにつくことができないで、

独りどこかの空を飛んでいるのだろうか。

屋根のあたりを舞う螢にも友がいて、

互いに追いつ追われつしている。

寒い霜の時期が迫って来ているから、

それができるのももういくばくもないのだろう。

物の変化は留まることがない。

我が目はいよいよ冴えて来て嘆息するのである。

だからこそ昔の人は、

夜も燈火ともしびを掲げて、

とにかく楽しいことを急いでしなければならぬと戒めたのである。

——えーと、結びは、快樂にふけるべしというエピキュリアンの宣言かあ。それを導いたのは強烈な孤独感ってことかな？ 梟とか鳳凰とか蛩とか、それぞれ暗示するものがあるんだろうね。歐陽脩が亡くなり、知事さんには理解されず、心を許せる仲間はいなくて……。



「秋懷」の詩はもう1首あります。

海からの風が来て、

三日続いた雨をすっかり吹き払ってくれた。

外に出る階段に滴が少し残っていて、

それがそつと話しかけて来た。

「あの頃、君はあの部屋で静かに過すのを、

何よりの歓びとしていたよね」

「ああ、そうか、君は、

故郷の僕の部屋の前の階段にあったあの滴なのだね」

「あの頃、君は、田畑で働いた後には、

壺に入れた酒を持ち寄って、

村人と一緒に互いの疲れを癒し合い、

寒さと飢えの折には、

葉に包んだわずかな飯を持ち寄って、

村人と一緒に慰め合っていたよね」

「今年は秋の稔りの時を迎えて、

故郷では、食べ飽きるほどの御馳走を並べていたりするのだろうか。

ああ、僕は一体何を求めて、

万里の川を流れ下って、

この海辺にまで来てしまったのだろうか。

故郷にいれば貧しくても食うには困らないのに、

なぜか田園に暮らすのでは満足できないと思ってしまったのだ」

露と語り始めたのは雨上がりの午後、

夜の窓辺に梟の声を聞きつつ、

語り続けて朝に及ぼうとしている。

ろうそく

蠟燭は暗く消えかけて、

今また不意に明るい光を発しようとしている。

——えーと、最後は、ローソクの光に何か希望を見出したって感じなのかな？ 1

首目の快樂を追求するための明かりとはゼンゼン違うみたい……。

それと、露と対話するというのは、ちよつとおもしろい発想かも。いつもの「隠退才チ」とは趣が変わって新鮮な感じがするもの。

㊦ 日本語に訳す過程で、ふと会話形式にしてみようと思いついたので、元の詩は実はそうではありませんでした。露を見て「幽人ゆうじんと語るに似たり」という思いを抱いただけで、露と会話してはいません。「幽人」というのは、世俗的価値から離れた奥深さを理解する人という意味です。そういう人と話すことを私は求めていたのでしよう。

——西湖で待っててもきてくれなかった人もいたしね……。

㊦ この頃に、孔文仲こうぶんちゆうという人が杭州に来て、少しばかりそういう思いを満たしてくれました。孔文仲は地方官を勤めていて、特別試験の制科を受けるよう推薦されたので上京しました。制科というものは、私の場合もそうでしたけれど、自

ら志願して受けるものではなく、しかるべき人々に推薦されて受けるものでした。孔文仲は優れた人物だと都にその名が聞こえていたわけですが、孔文仲は制科の試験の答案として書いた論文の中で王安石の改革を強く批判したために不合格となつてしまいました。孔文仲は地方での仕事に戻され、その帰路で杭州に立ち寄つたのでした。

では、孔文仲の詩を和したものを聞いていただきましょう。

私はもとより鹿の本性を有する者であるから、

国家という車の轅ながえを曳く姿に合致すべくもない。

貴君はベルシヤの駿馬の「汗血馬」かんけつばのようで、

その姿からして世に類がない。

天子より賜った鈴を身に付けて、

貴君と一緒に私は大道を走ってみて、驚いた――

疾走しつつ己の発するこの声を聞いたのだ。

「もう繋がれるのは御免だ！」

貴君は朝に北の草原を出発して、

まだ日が傾かないうちに、

もう長江ちやんこうの水を飲んでいて、

こう言うのだ――

「途中で止まってなどいられない！」

世の駄馬、驢馬ろまどもは貴君には付いて行けない。

金と錦と玉たまを纏まとった貴君の姿は、

傍目には実に美しいけれど、

貴君自身はこれらの飾りを嫌っている。

塩を運ぶ苦役の方が卑しいとする理由はなく、

どちらも人に使役されているのだ。

見るがよい、

天子を護衛する馬どもを。

自由に嘶くことも、あたりを見回すことも許されておらず、

鞭で叩かれて徹底的に仕込まれて、

己のものといったら骨と皮だけではないか。

人生にはそれぞれに志があるはずだ。

このようなことを私はいつも考えているのだけれど、

他人が聞いたら笑うだけなのだろう。

貴君だけは理解してくれるところがあるだろう。

こここのところの秋の長雨のせいで私は病み、

我が身を支えるのも厭わしく、

がらんとした部屋で伏せていた。

その間に、蔓草が垣根の上に這いのぼり、

落ち葉が階段でからからと鳴った。

門前には訪れようとする客人はなく、

だからと言って、誰かを呼ぼうとするでもなく過こしていた。

貴君がやって来られたとの報せに起き上がると、

結局は貴君は田舎の職務に留まると言う。

高潔な貴君と向き合って語ったことで、

俗吏の卑しい身にあることをしばし忘れることができた。

今朝はまた詩を寄せて下さったので、

きらきらと翼を輝かせて鳳おわとりが挨拶に来てくれたような気がした。

私は哀れにも、

山に登ってみたら梯子はなく、

海に落ちては深淵に迷い、

枯れた枝のような心地でいる。

貴君の言葉に潤いを得て、

心の内に華が開くような思いがしている。

世俗の人々は、

搔き^{むし}雀る心地よさを得るために、

むしろ腫れ物が出来るのを求めるといふ。

賢明なお歴々は日に日に登用されて、

美しい御殿で世を賛美する曲を歌っている。

ならばいつそのこと、

天下の最盛期を祝う一大式典のため頌歌を、

あらかじめ作っておくことをお勧めしたいものだ。

——えーと、途中で、「これはどういう意味？」って思うところがいくつかあったけど、とくに最後のところはさっぱりわかんない。改革に対してなんか皮肉をいってんのかな？



① 少しでも説明しましょう。昔むかしの中国では、天下が最もよく治まった極盛期に、皇帝が泰山たいざんに登って天の神々に祈り、山を下って地の神々に祈る封禪ほうぜんの儀式というものが行われることがありました。はつきりと記録に残っている最初は、秦の始皇帝が行ったものです。その後は、漢の武帝がていや唐の玄宗皇帝げんそうなど、名君として後世に名を残した皇帝が行いました。

宋では三代目の真宗皇帝しんそうが行いました。我が王朝のことなのであまり悪く言うのは憚れますが、真宗皇帝が摩訶不思議なプロセスを経て封禪の儀式を行ったために、封禪の価値が大幅に下落してしまいました。

宋王朝の基礎を築いた初代と二代の皇帝があまりにも偉大で、なおかつ非常に立派な宰相が揃っていたために、三代皇帝は即位以来コンプレックスに苛まれて

いたようです。そこに王欽若おうきんじやくという、稀代の「超絶付度男」が付け入りました。王欽若は、今こそは史上最良の時代、今の皇帝こそが史上最も偉大であるという一大キャンペーンを展開して、皇帝の心を完全に掴みました。王欽若は、天からの手紙、「天書」というものをでっちあげました。最初の天書は皇城の屋根に降り、役人が登って取って来ると、皇帝以下重臣が居並ぶ前で天書は開かれました。そこには、太古の字体で現在の治世を称賛する言葉が記されていました。それが偽物であると言う人は誰もいませんでした。これよりも前に、皇帝が最も煙たがっていた宰相は左遷されていて、次の宰相は事前に口止めをされていました。全ては王欽若が描いたシナリオ通りに事が進んで行ったのでした。こうして天書が一度降ると、全国各地に次々に天書が降り、世は一種の狂乱状態となり、そのピーク時に皇帝は泰山まで盛大なパレードをして、封禅の儀式を行ったのでした。

——へーえ、おかしなことがあったんだね。「裸の王様」みたいな話かな？ だれもがウソだ思いつつ、だれもいわなかったんだね。

㊦ 真宗皇帝が亡くなった後でも、皇帝自身が関わったことなので、あれは全てウソでしたとあからさまに言う訳にはいかず、臭い物には蓋ではありませんけれど、何となくあれはなかったことみたいにされました。

改革派が改革を矢継ぎ早に実施し、どれも成功していると皇帝に報告しているのは、天書が降ったと大騒ぎしたのと同じではないかと——そこまで露骨ではありませんけれど、かなりの皮肉を籠めたのが今の詩の終わりの部分です。

——「王様は裸だ！」と叫んだ少年みたいなことを、トーバー君はしたって感じなのかな。

それはそうとして、本性は鹿だと、トーバー君がいつもいつていることを、ここで詩に詠んだんだね。

㊦ 改革の実態がどのようなものであったのか、その一例として、じんわ仁和県の湯村とうせんで行われていた運河の掘削工事がありました。改革は国の生産力を高めるために、インフラ整備を進めることを一つの眼目としていて、全国各地で様々な土木工事が計画され進められていました。成果を急ぐあまり、どれだけ意味があるのかわからないような工事が無理な日程で実施されるといふことも少なくありませんでした。

湯村では、沿岸部で生産された塩を迅速に運ぶための運河を切り開く工事が進められ、しかし、秋の長雨のために計画よりかなり遅れていました。私は「秋懐」の詩を詠んだ直後に、工事の督促のために湯村に派遣されました。

——なんか、聞いてると、現代に通じる連想がいろいろ湧いてきてしまうよなあ。
天書騒ぎは、北の方の国の三代目の若旦那みただし、どっかの政党が総裁の三選に向けて動いているのとも似ているようだし、無理な工事は、オリンピックのためならなんでもありというのと同じみたいだね。人間の世界って、くだらないところはゼンゼン変わらないのかもね。なさけないよなあ。

㊦ 湯村の工事現場で詠んだ詩を聞いていただきましたよ。

昔ある人は、

官職に就いてはいても仕事は与えないので、

気持ち晴れ晴れとして実に結構と、

反語的につぶやいたけれど、

私はそれを羨ますにはいられない。

昔ある人は、

職を辞して、

いまこそ故郷に帰るべきだと決然と歌ったけれど、

私はその人に対して恥じずにはいられない。

運河の工事の期限は厳守、

督促は急で、

農耕の妨げになると憐れむ者はいない。

暁にドンドンと太鼓が鳴り響くと、

民衆の一万の指が溝の上に並ぶ。

天は、お上の仕事を手助けするつもりがあるのか、

雨がざあざあどと民衆の笠や衣に降り注ぐ。

民衆は鴨やら猪のようになって、

泥の中でもがき合う。

私は堤の上で馬から下りる。

四方を見れば、

どこも湖のように、水の下に沈んでいる。

我が足を細い溝に入れる。

牛や羊が争うように泥と格闘する。

故郷の田園に帰るのは、

身分を落とすことになるけれど、

泥の中で労働することに変わりはない。

それでも、自分で耕して得た物を皆で食へることが出来る。

だから、故郷の友よ、

私が間もなく行くのを待っていてほしい。

——トバー君も、泥に入っついでいっしょに仕事をしたんだ。さすがだね。同じ泥の中の労働でも、自分の田畑を耕すのなら、その労苦も収穫となつて自分の身に

返ってくるけど、運河を掘ってもその見返りはないってことがいいのかな？

㊦ 中央集権の官僚機構に組み込まれた地方官の私にできたのは、自ら泥をかぶ

って現場の志気を高めることくらいでした。

泥と格闘した後で、夜は水陸寺すいりくじというところに泊まりました。そのときの思い

を詩に託して、杭州の西湖畔の寺の清順せいじゆんという僧に送りました。詩の終わりにい

う「高人こうじん」、つまり気高い人とは清順のことです。2首続けて聞いていただきます。

小川の堤は草に埋もれ、

雨のために村は暗い。

奥まった竹林の中に寺が潜み、

どこに門があるのやらわからない。

寺の僧は気の毒にも病床にあつて、

薪を拾って薬を煮ている。

それでも、地を掃い、香を焚いて、

我が旅の魂を浄めてくれる。

村人の野良仕事は小雪をおかしてなお続き、

御仏に捧げる燈は黄昏のいま初めて灯される。

ここのとこ奥深く暮らすことの味わいがようやくわかってきたので、

高人と寢床を並べて語り合ってみたいものだ。

西湖のあたりでは、いつも鐘や太鼓が賑やかであるのを嫌っていた。

このあたりは静か過ぎるくらいだが、

それでこそ自然なのだろう。

寺の僧は村を巡って食を乞い、

真に満腹することを知っている。

客人に対して口を開かずにいるけれど、

それは禅の無言の業にあるのではない。

私は水の路を通すために、

草を開いて泥に入って来た。

いまは足を洗って門を閉ざし、

雨を聞きつつ眠ろうとしている。

遙かに想うのは、

夜の寒さの中で詩を練り上げている貴僧の姿だ。

——これって、どういう詩？　いまいちよくわかんないなあ。昼間の奮闘と夜の静けさを対比的に詠んでみたってことかな。

㊦ 任務の途中で、知事や杭州の同僚に向かって、工事の実態を報告する詩を書いて送りました。時は11月、もう寒い冬の季節でした。

新月に照らされた水は、

冷え冷えと光っていまにも凍り付きそうだ。

夜の霜が屋根を通り抜けて降って来るかのようで、

衣が冷たくこわばって来る。

労役に駆り出された土地の人々は、

一様に頬が赤くて眉が丸い。

田の中の小屋で、牛や羊と寢床を分け合い、

昼間の労働で、履き物が破れ、衣に穴が開いてしまっても、

それを繕う間もなく、眠りに落ちてしまう。

そして、暁には、

烏や鵲とともに起きて、

千人の人々が野に並ぶ。

その千の口に言いたいことがあるのだらう。

早く家に帰りたいと思わないわけではないだらう。

しかし、他人に嘲笑されるのを恐れて何も言わずにいる。

私は人々に向かってこう言っただけ——

我が州の立派な方々は、

民衆を使うことについてよくよくわかっておられるので、

新しい酒とたっぷりの豚肉を買って用意してくれているはずだ。

だから、寒さに耐えて頑張っただけ。

努力すればそれだけ帰る日が近くなる。

足がもしも寒さに凍り付いてしまったなら、

知事殿が御自身で揉んで軟らかくして下さるだろう。

——最後はイヤミ？ 知事がそんなことをするはずないよね。この知事さんって、

新しくきた知事さんだよ。その人とはうまくいったの？　こんな皮肉をぶつけたら、いやがられるんじゃないの？

ⓑ 前任者と比べたらずっと親密な関係になりました。その話は次回ということにしましょうか。

——そろそろ今夜も時間かな。余計なことはいわないと約束したけど、ゼンゼンだめだったみたい……。それでも、前回までよりはスピードアップに成功したね。いまの詩が11月で、ほぼ1年分を聞いたことになるもの。

ⓓ 湯村での任務を終えて杭州に帰り、冬至の日に吉祥寺に行った詩で一区切り

としまししょう。春に牡丹を見た寺です。

井戸の底に映る太陽をのぞき見ようとする――

冬至のこの日には、

わずかでも光の強さを取り戻していようかと。

しかし、枯れた草の根に、冷たい雨が静かに注がれている。

誰か少しでも似る者がいるだろうか、

牡丹の時期でもないのに独りここにやって来た蘇先生に……。

――ああ、いままで聞いてきた流れで、この詩はわかるかも。これって、ちよつと軽いタッチの自画像って感じだけど、ホントは重い内容があるんだよね。トー

バー君は孤独で、なんとかして希望を見出そうとしているってことだよね。

① この詩から十日余りして、もう一度吉祥寺を訪れています。先の詩では独りで吉祥寺に行ったと詠みましたが、実際には馬正卿と一緒にでした。二度目も同じで、

「やはりまだまだ牡丹は咲いてくれないようだな」

馬正卿に向かってそう語りかけると、

「梅でさえも、ようやく蕾がふくらみかけたかどうかというのを前回見たばかりではございませんか」

「わかってはいても、もしやと思っただけ」

「余程の御執心でありますな」

「杭州でのこれからの日々がどうなるのか、牡丹に現われ出るような気がしてな。それに、しばらくの間、杭州を離れることになりそうで、その間に咲いて散ってしまつては残念であるからな」

「どうしても今日ご覧になりたいのなら、殷七七いんしちしちさんにでも来てもらうのでしたなあ」

「殷七七？ はて、誰であつたらうか？」

「旦那様は一度お読みになつたものは必ずご記憶されると思つておりましたが、お忘れですか？」

「私もだんだんと年をとり、一度では心もとなくなつた。三度読まねばならないようだ」

「お義兄にいさまの王道矩おうどうく様が貸して下さいました。周宝しゅうほうと

いう人が新しい任地に来て、鶴林寺を訪れると、境内いっばいに杜鵑花の木が植えられているのを見て、『そうであった。ここ鶴林寺の杜鵑花は天下一と聞こえている。今は九月の重陽の節句も間近い頃。杜鵑花の咲く五月まで、とてもじやないが待てないなあ』とつぶやきますと、そこに居合わせた殷七七という道士が、『それほどまでに花をご覧になりたいのでしょうか』私にはたまたまここに来たのであつて、来年の夏までここにいられるとは限らない。せっかく鶴林寺に身を置きながら、杜鵑花を見られぬのでは残念ではなないか』そこまでおっしゃるのでしたら、重陽の節句にもう一度ここにお越しくださいます。菊の花とともに杜鵑花が咲き乱れる様子をご覧になれましょう。周宝はあり得ぬことと思ひながらも、9月9日に鶴林寺を訪れると、まさに満開の杜鵑花が見られたのでございます」

——えーと、お義兄さんの王道矩というのは、亡くなった奥さんのお兄さんで、仙人が出てくるような不思議な話が大好きな人だったわけ？ (第12回)。

ⓧ ということで、吉祥寺で次のような詩を詠みました。

春の神様はちよっぱかり薄情で、

梅の花だけを咲かせようとしている。

千本もあろうかという牡丹の木には、

まだ紅色の気配もない。

昔むかしの仙人の殷七七を呼んで来て、

そこもここも花を開かせてもらいたいものだ。

——トバー君には深く思い悩むところがあったから、どうしても牡丹をみたかったんだろっね。

① 次回は、年末に杭州を離れて各地を巡った出張旅行から始めて、今夜と同じペースでうまく進められたら、次の1年分をお話したいと思います。

* * *

清しんの時代おうばんこうに王文誥そふんちゆうこうが編集した『蘇文忠公詩編註集成』しへんちゆうしゆうせいというものがあ
東坡の詩集の底本としてよく用いられている。それ以前の研究成果を集大成し、
厳密な考証のもと、詩は制作年代順に並べられている。本集45巻と、補足5巻

から成り、トーパー君は前回までに第7巻の最初のところまでを語っていた。そのペースで計算すると、第45巻を語り終えるには100回以上かかることになる。イノ君は1年に6回トーパー君と会っているので、16年以上かかる。

今回はほぼ1巻分を語った。それなら残り40回程度で終わる可能性があり、7年で完結ということになる。しかし、杭州から後は、詩だけでなく文章も詞も作品数が大幅に増えるので、この計算通りには行かないかも知れない。

ともあれ、トーパー君が目指しているペースアップに私も合わせる必要があるだろう。イノ君が指摘していたように、私が録音を整理するのに要する時間が制約条件になりかねない。作業にあてる時間をいまよりも増やすのは難しく、効率を高めなければならない。すぐにできるのは、前回試みたばかりの原詩に基づく「戯訳」をやめることだろう。「戯訳」が蘇東坡の詩の理解の助けになるのかどう

かの吟味がなされる前に、止めてしまうのは残念であるので、とりあえず今回は、原詩の字面だけでも眺めてもらいたいと特に思う詩を数編選んで「戯訳」を施すことにする。

● 付録 『蘇軾詩集抄』

げやくぞしよくしゅうしょう
きねい
熙寧4(1071)年12月〜熙寧5(1072)年11月 蘇軾36〜

37歳

本文は孔凡礼点校『蘇軾詩集』(中華書局、1982)に準拠。訳文中の赤字は訳の都合で補った部分、傍線は人名や地名などの固有名詞であることを示す。

■ 臘日遊孤山訪惠勤惠思二僧

十二月のある日

臘 日のこと 孤山こざんに遊あそんで 惠勤えいこんと惠思えしの二にの僧にんを訪ねた

天欲雪

てん ゆき

天は雪をようふらせ欲として、

雲満湖。

くも みずうみ み
雲が湖に満ちてきた。

楼台明滅山有無。

ろうだい みえ みえな
楼台は明たり滅くなったり 山は有ったり無かったり。

水清石出魚可数、

みず あさ いし あらわれで うお かぞ られ
水は清いから石が 出て魚が数え可るほど、

林深無人鳥相呼。

はやし ふか ひと いな とり よ あ
林は深いから人が無くて鳥が呼び相っているだけ。

臘日不帰对妻孥、

この日 かえ 妻や子 顔を見る しな
臘日 帰って妻孥の 対 ことも不いで、

名尋道人実自娛。

名目 高僧 たす
名としては道人を尋ねるとして 実は自の娛のためにここに来た。

道人之居在何許

高僧のすまい どこ あ
道人之居は何許に在るのかというと、

宝雲山前路盤紆

ほううんざんじ まえ みち うねうね
宝雲山寺で その前にいたる路は盤紆としている。

孤山孤絶誰肯廬

こざん ひどり せけん はなれ だれ あえ いわり
孤山はまさに 孤り世間から 絶ていて 誰も肯えて 廬をむすぼう

とはしないけれど、

道人有道山不孤。

高僧 ほとけ みち そなわ わたし みち たす
道人には 仏の道が 有っているために 私のように その道を尋ねてくる

ひと
人があるから、山はもはや孤立してない。

紙窓竹屋深自暖

かみ まど たけ いおり
紙をはった窓のある竹の屋はおもむき深くて自ずから暖く、

擁褐坐睡依团蒲。

くず ころも はお ふとん よ いねむり
褐の衣を擁り团蒲に依りかかって坐睡をしてしまった。

天寒路遠愁僕夫、

てんこう さむ いえじ とお 従者 心配顔
すると天候は寒いし家路は遠いからと僕夫が愁をしていたので、

整駕催帰及未晡。

駕籠 用意 かえ ま 夕暮れ ならない
駕を整させて帰ることに催のは未だ晡には及ころだった。

出山回望雲木合

山やまを出てからで 回ふりかえつて望みると 雲くもと木きが合あになつていて、

但見野鶻盤浮図。

ただみ

寺の塔

但見えるのは 浮図めぐのうえを盤はやぶさる野鶻だけだつた。

茲遊淡泊歆有余、

この

あそ

あつさり

茲の遊びは淡泊よろことしていても 歆あまびは余あり有るほどで、

到家恍如夢蘧蘧。

いえ

ついで

ぼうつ

ゆめ

もやもや

家に到てからも恍感じとして夢感じの蘧蘧感じとしたなか感じにいる如感じだつた。

作詩火急追亡逋、

いそい

にげる

お

火急しで亡逋しの追しうしようにしてこの詩しを作るしのは、

清景一失後難摹。

きよ シーン ひと うしな あと なぞ むずか
 清らかな景も一たび失われてしまった後では暮るのが難しいから
 だ。

■ 戯子由

おとうと たわむ
 子由に戯れる

宛丘先生長如丘、

えんきゆうせんせい 背の高い おか よう
 宛丘先生の長のは丘の如なのに、

宛丘学舎小如舟。

えんきゆう まな や ちっぽけ ボートくらい
 宛丘の学舎は小で舟如しかない。

常時低頭誦経史、

常時いつだつて頭あたまを低ひくくして経史書物を誦読み上げていて、

忽然欠伸屋打頭。

忽然ふいに欠伸あくびでもしようものなら屋天井に頭あたまを打ちつけてしまうう。

斜風吹帷雨注面、

斜ななめに風かぜがきて帷カーテンを吹ふきあげると雨あめが面かおに注そそぎ、

先生不愧旁人羞。

先生せんせいは不愧気にしないけれど旁かたわらの人は羞ひとにおもうう。

任従飽死笑方朔、

任従香気にたらふく食つてばかり飽いると方朔古の名臣に笑わらわれるのも先生せんせいは任従かまわないし、

肯為雨立求秦優。

あめ た
雨に立ちんぼうの**労苦**も 秦 優の**救い**を求め肯とは為ない。
ろうく 皇帝の御伽衆 すく もと よう し

眼前勃谿何足道、

め まえ いげいげ
 眼の前で勃谿があつても 何く道うに足りないといと、
また い た

処置六鑿須天游。

目・耳・鼻・口・心・知 コントロール てん あそ
 六 鑿 を処置して天に遊ぶこちで須る。
いられ

読書万巻不読律、

どくしょ 一万冊
 読書するのは万巻にもおよぶけれど 律は読まないので、
マニアル よ ない

致君堯舜知無術。

さみ
 わが君をさながら堯舜に致る術など無いと知っている。
古代の聖天子 す マジック な おも

勸農冠蓋鬧如雲、

生産性を高めよ スローガン やかまし くも よう
勸 農との冠蓋が 鬧く雲の如にわきたつても、

送老齋塩甘似蜜。

歳月 おく なら しお みつ に うま
老を送るには 齋に塩をかけさえすれば蜜に似て甘いと、ふざけたこ

とをつぶやいている。

門前万事不掛眼、

もんぜん 何があるう め と な
門前で万事と眼に掛めることなく、

頭雖長低気不屈。

あたま ずうつ た ても 気持ち おれ ない
頭は長と低れたままでいてそれ雖 気は屈はし不のだ。

余杭別駕無功劳、

いっぽう 杭州くんだり 副知事 働き な
その一方で 余杭の別駕さんときたら功劳が無いくせして、

画堂五丈容旂旄。

一派なお家

二十メートル

旗 竿 い

おお

画堂とききたら 五丈もの旂旄を容れられるくらいに大きいのだ。

重楼跨空雨声遠

高い建物

虚空

また

あめ こえ

とお

き

重楼は空を跨くほどだから 雨の声など遠くに聞くだけで、

屋多人少風騒騒。

部屋数

おお

ひと

すく

かぜ

ぐるぐる

屋が多くて人が少ないからそこらを風が騒騒まわっている。

平生所慚今不恥

ふだん

そりやないよと思っていた

いま

はずか

なく

平生は 所 慚 ことも今や恥しさも不なつて、

坐对疲氓更鞭箠。

やつ

民衆

なんのこと

むか

もっとむちでうて

疲れた氓に 坐 なく対つて 更鞭箠とさこえいのである。

道逢陽虎呼与言、

みち 横暴なお偉いさん あ (へい) いっしょにかたり

道で陽虎に逢えば呼と与言あい、

心知其非口諾唯。

こころ それはまずい わか 結構でございませす

心では其非と知っていても口では諾唯というのだ。

居高志下真何益

暮らし向き 立派 こころざし ひく

居が高で志が下いだから真に何の益があるのやら、

気節消縮今無幾。

根性 ちぢ き いま ほとんどなく

気節なんぞというものは縮んで消えて今や幾無なつてしまった。

文章小技安足程、

ぶんしょう つまらないうざ 世のために するわけ

文章をつくるなんぞ小技で足程なつたり安がないのに、

先生別駕旧斉名。

せんせい 副知事 もと ひとし

先生と別駕は旧は斉くそれで名をなしたのだった。

如今衰老俱無用、

あれ くだくだ 二人とも 用なし

如今から衰老になつて 俱に無用になつてしまつてゐるけれど、

付与時人分重軽。

皆様方 どつちがまし 判定 おまかせ

時人に重軽かの分を付与したい。

■ 吉祥寺賞牡丹

きつしやうじ ぼたん めで

吉祥寺で牡丹を賞た

人老簪花不自羞

ひと お はな かんざし 自分 はじら ない
人は老いても花を簪にして自だけは羞わ不でいるけれど、

花應羞上老人頭。

はな やは ろうじん あたま つけ はずか
花は応り老人の頭に上られているのを羞しがっている。

醉帰扶路人応笑、

よ か たす みち ひと さだめ
酔つて帰つて 扶けられて路をゆくのを人は応し笑っていることだろう、

十里珠簾半上鉤。

五キロにも たまのすだれ ほとんど 巻き上げられ
十里わたつて珠簾が半ど上鉤っているのだから。

■六月二十七日望湖楼醉書五絶

ろくがつにじゅうしちにち ぼうこうろう よ か ごしゆ ぜっく さんしゆ
六月二十七日に望湖楼で酔つて書いた五首の絶句(そのうちの三首)

黒雲翻墨未遮山、

くろ くも すみ ひつくりかえ

黒い雲が墨を 翻 すようにして 未だ山を遮さないうちに、

ま やま かく

白雨跳珠乱入船。

夕立の雨 たま は

白雨が珠を跳ねかえすようにして船に乱入してきた。

ふね らんにゆう

卷地風来忽吹散、

ち まくりあげる

地を 卷 ような風が来て 忽ち吹き散ると、

かぜ き たちま ふ おさま

望湖楼下水如天。

ぼうこうろう した みず まる 青空

望湖楼の下の水は如で天のようになった。

*

*

放生魚驚逐人来、

こゝは放生の池であるから 魚も驚も人を逐うようにして来るし、

無主荷花到处開。

持ち主

な

主が無くてすべてが自然のものである荷の花が到る処で開いている。

はず はな いた ところ ひら

水枕能令山俯仰

みず

まくら

水を枕とするなら 能いぐあいに山を俯仰 令ることができ、

うまい

やま

あげたりさげたりさせ

風船解与月徘徊。

ふね

かぜ

船を風にはなつなら 解よく月与徘徊ことが出来る。

ちやうど

つきとさまよう

*

*

未成小隠聊中隠

ま

故郷に退隠

未だ小隠することが成ないから 聊は 中 隠 しかないので、

でき

しばらく

役人の身として隠者をかこ

可得長閑勝暫閑。

ずつとひま

ちよとのひま

まさ

え

でき

長閑なのは暫閑に勝るといふのを得るのは可そうにない。

我本無家更安往、

わたし

もと

いえ

な

さら

どこへでもい

我には本より家が無いのだから 更に安往こうではないか、

故郷無此好湖山。

ふるさと

こ

すばら

みずうみ

やま

な

だって故郷には此の好しい湖と山だって無いではないか。

■秋懷二首

あき おもい にしゆ

秋の懷 二首

苦熱念西風、

ひと あつ
あきかせ ねが
苦く熱いときは西風を念つて、

常恐来無時。

いつ くとき ない おそ
常もそれが来る時がもう無のではと恐れていた。

及茲遂淒凜、

こゝし およ どう ひえびえ
茲に及んで遂どう淒凜として、

又作徂年悲。

とし ゆ かなし まで もよお
年が徂くとの悲み又も作すようになった。

蟋蟀鳴我床、

こおろぎ わたし 寝床 な
蟋蟀が私の床で鳴き、

黄葉投我帷。

きいろ は わたし まどべ カーテン とんで
 黄い葉が 我の窓辺の 帷に投くる。

窓前有棲鵬

まど まえ ふくろう す
 窓の前には 鵬が棲んで有て、

夜嘯如狐狸。

よる な きつね たぬき よう
 夜に嘯くのは狐や狸の如だ。

露冷梧葉脱

つゆ つめ あおぎり は お
 露の冷たさに 梧の葉は脱ちてしまひ、

孤眠無安枝。

ひと ねむ ほうおう やす えだ な
 孤り眠る鳳凰が安らぐことのできる枝は無い。

熠燿亦有偶

ほたる ま 友 あ
熠燿にも亦た偶が有つて、

高屋飛相追。

たか 屋根 と お あ
高い屋のあたりを飛んで追ひ相つている。

定知無幾見、

きつ し
定とほたるは知つているのだらう 見
こらしてられる わすか な
のも幾しか無くて、

迫此清霜期。

こゝろ つめた しも きせつ せま
此に清い霜の期が迫つてきているのを。

物化逝不留

もの変化 すずん としごま な
物化は逝で留るところがない、

我興為嗟咨。

わたし お このことをおも なげ
 我は興きて 為 って嗟咨くのである。

便当勤秉燭

だか おかし ひと とにか せいをた あかり と
 便ら昔の人は 当く勤 して 燭を秉つて、

為楽戒暮遅。

たの す ぐずぐず いまし
 楽しいことを為るのに暮遅するなど戒めたのだ。

*

*

海風東南来

うみ かぜ どうなん き
 海からの風が東南から来て、

吹尽三日雨。

みっか あめ ふ とば
 三日つづきの雨を吹き尽してくれた。

空階有余滴

しずか 階段 のこり しずく あ

空な階に余の滴が有つて、

似与幽人語。

奥深い ひと とも かた

幽い人と与に語るかの似だ。

念我平生歡

おも わたし かつてよろこ

念うに 我が平生歡びとしていたのは、

寂寞守環堵。

しずか 小さな部屋 内にある

寂寞に環堵の守ことだった。

壺漿慰作勞

はたけ で 壺の酒 労働 なぐさ

畑に出れば壺漿で作勞を慰めあい、

裏飯救寒苦。

こんきゅう

ひと

困窮する人がいれば

めし

葉につん

さむ

くる

飯を裏で寒さ苦しきから救いあった。

すく

今年秋応熟

ことし

あき

きつ

豊作

今年の秋は応と熟で、

過従飽雞黍。

互に行き来

ごちそう

食へあきて

過従して雞黍を

飽

いることだろう。

嗟我独何求、

あわたし

ひと

なに

もと

嗟我は独り何を求めて、

万里涉江浦。

かわ

わたし

ばんり

みち

わた

江やら浦やらの万里の道を涉ってきたのだろうか。

居貧豈無食

まず くらし
貧しい居をしても食へられ無い豈ではあるまいに、

自不安駄畝。

自分勝手 田舎暮らし 満足 ない おも
自に駄畝では安できと思^{おも}ってしまったのだ。

念此坐達晨

この おも
此ことを念ううちに坐か晨に達としてしまい、

残燈翳復吐。

消え ともしび かけ ま ひかり はなた
残かかった燈の翳から復た光が吐れもした。

■ 湯村開運塩河中督役

湯村とうそんに塩しおを運はこぶ河かわを開ひらき 雨あめの中なかで役工事を督督促した

居官不任事、

官職

ついて

仕事

まか

ない

官官職に居ついていながら事仕事を任まかされ不ないので、

蕭散羨長卿。

暇をかこ

司馬相如

うらや

蕭散暇をかこつていた長卿司馬相如を羨うらやましくおもう。

胡不歸去来、

どうし

かえ

しまおう

ない

胡どうして歸かえつて去来しまおうとし不ないでいるのか、

滯留愧淵明。

ぐずぐず

陶淵明

はず

滯留ぐずぐずしていて淵明陶淵明に愧はずかしくおもう。

塩事星火急、

しお 工事 スケジュール いそ
塩の事の星火は急げいそげで、

誰能恤農耕。

だれ のうこう

誰も農耕のさまたげになつてしまふのを恤れもう能しない。

あわ とも

薨薨暁鼓動、

ドーンドーン あかつき 太鼓 ひび

薨薨と暁に鼓が動くと、

万指羅溝坑。

まん ゆび 運河 あな なら

万もの指が溝の坑に羅ぶ。

天雨助官政、

てん お上 まつりごと たす

天は官の政を助けるつもりがあるのやら、

泫然淋衣纓。

ざあざあ あめ 衣類 そそ
 泫然と雨が衣纓を淋がれる。

人如鴨与猪

ひと かもやらいのしし よう
 人は鴨与猪の如に、

投泥相濺驚。

どろ み どう たがい べちやべちや もが
 泥に身を投じて相に濺と驚いている。

下馬荒堤上、

あ つみ うえ うま お
 わたしは荒れた堤の上で馬から下り、

四顧但湖泓。

四方 かえりみ ただ みずうみ
 四を顧ると但ただ湖泓のようになっているではないか。

線路不容足

うんが とお
運河を通そうとして、
みぞ あし いれ ない
線路は足を容れられなくらいで、

又与牛羊争。

とにか うしやらひつじ

又く牛与羊やらと泥んこで争うようなものだ。
どろ あらそ

帰田雖賤辱、

故郷

かえ

身分を落とす

田に帰るのは賤辱ことになる雖ども、
けれ

豈識泥中行。

どろ なか

労働

やはり

泥の中での行が豈そこにもあるのは識ことだ。
しれた

寄語故山友、

故郷

やま

とも

ことば

よ

故の山の友に語を寄せるのは、

慎毋厭藜羹。

草の粥
藜羹をわたしとすするようになるのを慎けつして厭いやがら母ないでほしいと。

■冬至日独遊吉祥寺

とうじ ひ ひと
冬至の日に独りで吉祥寺きつしょうじに遊あそんだ

井底微陽回未回、

井戸いど ぞこ わずか 太陽の輝ほき もと
井の底では 微わでも 陽やうが回まっているだろうか 未まだ回もらないだろう

か、

蕭蕭寒雨湿枯荻。

しとしと つめた か 草の根くさのね しっとりぬら
蕭蕭と寒い雨が枯れた荻あしを 湿ぬらしている。

何人更似蘇夫子、

どのひと ちよいと 蘇先生 に
何人が 更でも蘇夫子に似ていようか、

不是花時肯独来。

はなとき ない 苦勞 ひと き
花時でも不是のに肯にも独りで来ているのだから。